



東京 東軍  
 救世軍  
 出版及供給部

大震災後の救世軍

特114

576

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特刊  
576



### ブリス大將よりの來電

(日本の救世軍人に與ふ)

日本に於ける此度の非常なる慘禍は最も深く私の心を痛めた。全世界の救世軍は一齊に多大の同情を寄せて居る。其の爲に喪はれた軍人に對しては、眞に哀悼に堪へない。けれども亦神の不思議なる御守護が多數軍人の上にあつたことを感謝する。

又此の際速に救護運動に着手された事を喜ぶ。斯る場合に救世軍が世の悩み悲しむ人々の爲に、極力盡瘁するのは其の本分である。引續き其の方面に努力を試みられよ。

さり乍ら同時に私は各小隊の士官及び兵士に警告する。各々其の持場を守れ。基督は大なる醫癒者である。國民の創痍は唯彼によりてのみ最も善く、又最も満足に醫さるべきことを、告げ知らせよ。人々の心に基督の要求を示せ。盛んに悔改の座を用るよ。靈魂に往け。極悪人に往け。特に兵士を造らんが爲に力を盡せ。

イーヂー中將と山室大佐は、然るべき指揮をするであらう。忠實に之に従うて前進せよ。そのうち私は諸君を訪ねるであらう。しかも其の時には、今よりも一層優勢で、又一層有力なる軍隊を見んことを期待するのである。

一九二三年一月二日

ブリス大將

大正  
14. 8. 1  
内交

## 序

未曾有の大震災に際し、各方面に手痛い打撃を受けたにも拘らず、直に灰燼の中より立ち上つて、不幸なる罹災者諸君に、私共としては最大限度ともいふべき奉仕を續けつゝ、同時に焼失した各般事業の復興に努力し、以て今日に至ることを得たのは、ひとへに神の大なる恩寵によるとは云へ、亦實に内外無数の軍友の深厚なる同情によるのは、申上げる迄もない。眞に感佩に堪へざる所である。

其の以來餘りに軍務に追はれ、一向事業の報告を怠つて居る折柄、私は約一年間渡英して、我が軍將來の爲に種々協議打合等を遂げねばならぬ必要を生じたので、せめて其の以前に極めて大ざつばな事業の状況をなりとも世に公にせねばならぬ責任を感じ、大多忙の中からこんな小冊子を編纂することゝなつた。それがこの様に不完全なものかは誰よりも先づ、編者が最もよく之を知つ

て居る。けれども今はこれ以上に入念のものを作る違がないのであるから、其の點に就いては、切に讀者の寛容を請はねばならぬ。

大正十四年六月渡英の途に上らんとする前二旬

編者

徳富蘇峯氏が國民新聞紙上に掲げられた「救世軍と山室君」てふ一文を附録として轉載することを得たのは、眞に光榮の至である。

### 目次

ブース大將よりの來電	一
地震と火の後の(説教)	一五
大震災の當日	一四
嗚呼勇士は仆れたる哉	一七
大震災に於ける救世軍	二一
五拾萬圓の物資を配給す	二一
臨時の震災救護事業	二四
救療事業	二九
婦人救済と育兒	三二
釋放者保護	三六
勞働寄宿及び職業紹介	三九
隣保事業	四一
多方面の活動	四二
救靈戰の勝利	四七
最も有力なる軍友	五〇
救世軍の陣容	五二
聖恩無量	五三
當局の理解ある助成	五四
天下の同情	五六
救世軍と山室君(附録)	五九

蘇峯生

# 大震災後の救世軍

大佐 山室 軍 平 編

## 地震と火との後(説教)

(大正十二年十一月一日、ときのことゝ)

「風の後に地震ありしが地震の中にはエホバ在さざりき。又地震の後に火ありしが火の中にはエホバ在さざりき。火の後に靜なる細き聲ありき」(列上一九。一一、一二)

豫言者エリヤは神の山ホレブにて神に見ゆること、なつた。彼が洞穴の中に入つて待つて居るに、山を裂き、岩を飛すやうな大風があつたが、大風の中には神が在さなかつた。次に地軸を振蕩するやうな地震があつたが、地震の中には神が在さなかつた。更に恐ろしい火が燃えたが火の中には神が在さなかつた。大風も、地震も、火の後に、涼しく清い御聲が響き、神は彼に其の大御心のある所を、示し給ふたといふのである。

大風の事はしばらく措き、日本國民は此度其の帝都を中心として、大なる地震に遭ひ、同時に大なる火事に遭ふて、前古未曾有の痛苦を経験した。私共は此の地震も火の後に、亦涼しく清き神の御聲を聞くことは出来ぬであらうか。セキスビヤは「一羽の雀の地に墜つるにも、神の特別なる攝理が存する」といふた。況んや此度の大事變の如き、幾十百萬の死傷者、罹災者を出した未曾有の

出來事の中に、神の攝理がなくてごうしよう。私共は此の深刻にして悲痛なる實物教育に、學ぶ所がなくてはならぬ。

第一 地震ミ火事の後の涼しき御聲は、物質の頼まれぬことを私共に告げて居る。「人の富みて其の家が榮加はらん時、汝恐る、勿れ。彼の死ぬる時は、何一つ携へて行くこと能はず、其の榮は之に従ひて下ることをせざればなり。」「愚なる者よ、今宵汝の靈魂をさらる、ここあるべし。さらば汝の備へし物は誰のものになるか。」此度の地震ミ火事は、一朝にして大廈高樓をも灰燼に歸せしめた。日比谷公園には十萬圓の身代を有する人が、其の日現金七千圓あつたうちの三千圓を攫んで外へ出やうとしてつぶれた家の下敷となり、持つて居つた金はなくし、身には重傷を負ひ、夫婦で粗末なバラツクに起臥して居る者がある。物質だけを頼りにして居る人が、そんなに乏しいものかを、今度の天災は私共に教へ示して居るではないか。

第二 地震ミ火事の後の、涼しき聲は又、人生の果敢なきことを告げてゐる。本所の被服廠で焼け死んだ數萬人、横濱の正金銀行でむし殺された數百千人は、言ふも更なり、煉瓦の下敷となりつて死んだ人、屋根から落ちて來る瓦に打仆された人等、多數の不幸なる同胞を思へば、眞に身の毛もよだつ思がする。それにつけても私共は、人生の幾許でもないことを知つて、それに對する覺悟を定めねばならぬ。「エホバよ願くば我が終ミ、我が日の數の幾許なるかを知らしめ給へ。我が無常を知らしめ給へ。視よ汝我が凡ての日をつかの間に去らしめ給ふ。我が命御前にては無きに異ならず、實に凡ての人は皆其の盛りの時にも空しからざるはなし。」又歌に「かゝる時こそ命の惜からめ、かねてなき身と思ひしらすば」こあり。私共は此度の天災によりて、今更のやうに、人生の常なきことを教へらるゝのである。

第三 地震ミ火事この後の、涼しき聲は、私共に罪の歡樂の空しいことを教へる。酒をのみ、肉慾を縱まにし、虚榮にあこがれてそれが何よりの幸福である如く思うた人々の上に、絶大の痛棒は加へられた。ソドム、ゴモラには天から硫黄ミ火を降した如く、罪を犯す者には屹度嚴罰が加はるのである。此度の天災は私共が虚榮を棄て、放逸を悔い、實質あり、生き甲斐ある生活をなすべきことを警告する。神の前に放蕩息子の如き生活を營み、爲に行き詰つて、精神上に餓えて死なんとして居つた國民は、今や「起ちて其の父に行くべき」時に遭遇したのである。

第四 地震ミ火事この後の、涼しき聲は、私共に神を呼び求むべきことを教へて居る。「人窮すれば則ち本に反る。故に勞苦倦極未だ嘗て天を呼ばずんばあらず」こ、古人は言つた。既に物質の頼むに足らぬ事、人生の常なき事又罪の歡樂の空しき事を示された私共は、神に行かずして誰に行かうか。今は日本人が大に目さめて、至仁、至愛の天父に立歸るべき時である。震災に遭うて二階から轉がりながら念佛を唱へ、梁の下敷になりながら神に祈つた當時の眞實心を助長せよ。「此の苦しむ者叫びたればエホバ之を聴き、其の凡ての患難より救ひ出し給へり。」「我驚きあわて、言へらく、汝の目の前より絶れたりこ。されど我汝に呼び求めし時、汝わが願の聲を聴き給へり。」日本國民は神を認め、其の御前に生くる人民ならねばならぬ。

第五 地震ミ火事この後の涼しき聲は、赤裸々にした人間の價值を知るべきことを警告して居る。先祖傳來の財産を當てにしてはならぬ。巨大なる建物ミ山の如く積んだ物資ミを誇つてはならぬ。唯汝自らの實力如何を省みよ。大切なるは箇人の品性である。風袋を除けた赤裸の人間の價值こそ、何より貴いものであるこ、此度の天災は私共に説き示して居る。私共は心の底迄見給ふ神の前に、それだけの價值ある人間であるか。「げに低き人は空しく高き人は偽なり。凡て彼等を秤に置かば、

上にのぼりて虚しき物よりも軽きなり。私共は基督によりて罪より救はれ、神の子供としての、價値ある生活をなし、又神の民としての奉仕を勵まねばならぬ。

第六〇地震と火事との後の涼しき聲は、人のなさけの最も大事なことを教へて居る。「おちぶれて袖に涙のかゝるさき、人の心の奥ぞ知らる。」かうした大厄難に會すれば、人の心の奥に潜む愛、又同情の念が自ら光を放つものである。しかも唯其の心をさへ推ひろめて行けば、神の御國は世に來るであらう、それ故私共は患難辛苦を通じて眞の愛を學ばねばならぬ。殊に大切なるは、此の際既に神を知れる者が、罪人と神との間に仲保者の苦心をすることである。同胞の救の爲に祈り、彼等の罪を滅亡を免れん爲に盡せ。大なる天災は私共國民を鍛錬し、陶冶して、神に近づかしむるの好き機會である。此の際、自分勝手の小私を棄て、隣人を愛し、同胞を愛し、殊に同胞中の弱者、不遇の人々を愛し、進んでは人類を愛することを學ぶを得せしめよ。

第七 地震と火事との後の涼しき聲は、私共が永遠の爲に生くべき事を教へる。「朽つる糧の爲ならで、永遠の生命にまで至る糧の爲に働け。これは人の子の汝等に與へんことをものなり。」我等の願ふる所は見ゆる者にあらず、見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時にして見えぬ者は永遠に至るなり。私共は明日にも暇を告ぐべき此の世の事物を以て満足することが出來ない。私共は永遠の爲に生き存らへるものならねばならぬ。私共の最後に落着くべき先は天にあるのである。

久しい以前、新英洲に可なり大きな地震のあつた時、急に基督教に接近するものが多く現れた。そこで或宗教家が注意して、彼等の動機を探つて見るに、其の多くは唯地震が恐ろしかったから、其の後も不安で堪らないからといふ位の程度のもので、其の際眞に自分を神の前に吟味し、罪を悔い心を改めて救を求むる、深刻なる個人的の宗教に心がくるものが、餘り少いのには驚いたといふこと

がある。それ故唯地震と火事とに驚いた丈では足りない。私共は地震と火事との後に、涼しき神の御聲を聞かなくてはならぬ。「神よ汝は我等を試みて白金を鍊る如くに我等を鍊り給ひたり。」又「我等は火の中、水の中を過ぎゆけり。されど汝は其の中より我等をひき出し、豊なる處に至らしめ給へり。」と、古人は言ふた。さうか此度の異常なる天災の、私共、日本國民に及ぼす影響が、亦此の如きものであらんことを祈るのである。

## 大震災の當日

(大正十二年十一月一日、ときのこと)

### (一)

その朝八時半、私は一友人の渡米するのを見送つて東京驛に赴き、九時半靈南坂の日善會社に行つて、レコード兩面に短い宗教上の講話の如きものを吹き込んだ。これはかねがね發明協會々頭阪谷男からの依頼があつたからである。かくて後自動車で送られて一ツ橋の救世軍本營に出勤したのは、午前十一時頃のことであつたことを記憶する。

數人の來客に接し、多少の事務を執り行つてかれこれ十二時にならうとする折柄、忽ち彼の大地震に遭遇したのであつた。私は二十歳のさき濃尾の震災地に出かけて、孤兒救濟のお手傳をした経験があり、地震のさきに狼狽して外へ飛び出すものが、落ちてくる屋根瓦に打たれたりなごする實例を多く知るものから、地震のさきには狼狽しないで、たゞ速に火元に注意し、また扉を開放しておいて、徐に出て行くべきことを、心がけてをつた。それ故この日も三階の角の私の事務室にあつて、颯烈

せんばかりに揺ぶられながら、暫くはその儘立つて窓から外の様子に注意してゐる。はや眼前に近隣の家々がつぶれだし、救世軍本營の高塔も墜ちたやうに覺えたので、これは非常な大地震であると思ひ、隣室に、そのまた隣室にをつた二人の士官に言をかけ、外に出でんことを促しておいで、室外の左の階段に行つて見る。はや上から崩れ落ちた煉瓦や木片で道が塞がつてゐる。右の階段に行つてみる。こゝにも上から落ちてきた木片や煉瓦で胎内くゞりのやうな出口を存するのみであつた。暫く待合せてぞろ／＼上から落ちてくる物質の、ちよつと止まつた瞬間に、私はその胎内くゞりのやうなところを通つて二階に降りてみる。はやそこらには誰もゐなかつた。更に下階に降りて數人の士官を見、「他の人達は無事か」問ひつゝ、入口に出る。本營の門前に一青年が大きな煉瓦の壁の崩れに足を壓へられて倒れてゐる。その煉瓦の上にまた街路樹の梧桐が倒れ、その梧桐の上に、更に他の煉瓦の大きな塊が落ちて、彼は二重三重の重みに壓せられ、苦悶してゐるのを見出した。四五人寄つて煉瓦をこぢたが中々動きさうにもない。不圖氣が付て「鋸を持つて來い」といふ。本營にはない」と誰か答へた。「こゝかへ行つて借りて來給へ、人命に關する場合だ。」と嘯鳴る。一士官が向うの家にゆき鋸を借りて來た。それで街路樹の梧桐を私が半分ほぎ伐る。誰かあゝの半分を伐り、青年は街路樹の上のつかつた煉瓦の重みから免れた。このころは今一片の煉瓦の塊だけであるから、みんなそれを、こぢ上げる拍子に、青年はその足を抜いて、彼は危なく死地を脱することゝできたのである。

## (二)

こんなことをしてゐる間に、多分十五分か二十分は経つたのであらう。私はその間も二人三人の士

官に、「他の人達はさうなつたか、見てくれ給へ。」と叫んで、會館のあたりをのぞかせたが、終に要領を得なかつた。會館は早や屋根が落ちて何がなんだか様子がわからなくなつてをつたからである。忽ち本營の横手から山中少校が面色土の如く、顔に怪我をした儘でよろめき出でるのを見た。彼は本營の南横手にある高い、細長い室で、日中の祈禱會に列つてをり、地震のために窓から外に彈ね出され、危い生命を拾うたのだといふことが解つた、しかも彼の言によつて同じ室になほ二三の士官が留つてをつたことが知れた。さあ大變である。彼等の生死はさうであらうか、急いで南横手にまはる。建物の上部の壁が落ちた、めに、細長い室の天井が長く地に垂れて、攀登するには都合好き自然の階段ができてゐる。私は四五人の士官と一緒にそれを傳つて登り、長い室の一ツ橋通に寄つた側に行つて見る。果して植村參軍の助を求むる聲が聞えた。彼の足の上には疊一疊ほどの大きな煉瓦の塊が落ちかゝつてゐるのであつた。押しても突いても中々動かないのを、漸くのこゝで反對の方角へひつくり返し、彼を救ひ出す。その下から更に荒川少校の姿が現れ出た。彼は稍傷が輕かつたので、自分の足で起き上りつゝ、そこを出た。「もう誰もをらぬか」問ふ。指田中佐がまだ残つてゐる。いふ。成程、彼の足が前の煉瓦の破片の間に見えるらしい。その頃は早や隣裏の家から出火し、黒い煙が盛んに我々の働いてゐる邊へ吹きつけ、そろ／＼その熱を身に感じ出した。早くせねば煙に巻かれて死ぬかも知れぬと思つたが、しかし中佐を見殺しにして我々のみ生きてをらるゝものであらうか。「サア來い、いま一息だ」掛聲をかけつゝ、大きな煉瓦の塊幾つかを排除して、漸く中佐を引出したが、彼の身體はだらりとして甚だ力がなかつた、下から氣を利かして細引を投げ上げた者があつたので、中佐をそれにつないで下に降すのを見届けつゝ、早や刻々火の煙が迫つて來るので、私は前の天井裏の階段を傳うて降りる代に、約一丈ほさある所を飛んだ、餘程



注意したつもりであつたが、前額を板にぶつけて微傷を負ひ、また掌に僅かばかりの怪我をした。

(三)

その頃頼りに大きな地震がゆり返し、人々は右往左往に駆せまはる最中であつたから、近所の病院に行つて見たが、がらんさうである。一士官を豫て相知る附近の醫者に騙けつけさせたが、また家中がらあきであつた。怪我人を電車道に横へたま、氣を揉んでゐるころへ、親切な一醫師が来て、殊に重態である指田中佐に、カンフル注射なごしてくれ。「心臓が丈夫だから。」と言はれたが、しかし右の額に深い打傷があるのさ、また後部の頭蓋骨が破れてゐるらしいのさは、私共に一方ならぬ心配を與へた。そのうち戸板や、廣告札の如きものを探し出し、間に合せの擔架を造つて、前の窓から弾ね出された山中少校を合せて、四人の負傷者を順ぐり商科大學の正門から入つて、左の青草の上まで運んだ。こゝではお向ひの齒科病院の醫師や、看護婦が来て、種々叮嚀な手當をしてくれられた。殊にその際金森ドクトルの厚意さ、松屋呉服店の關根氏の同情さは、私の肝に銘じて忘れ得ぬところである。さいふのは、關根氏はかゝる急場にも拘はらず、毛布や、蒲團や、シヤツまで持つて来て、我々の怪我人に給與せられ、また金森ドクトルはかうした忙しい中を再三來つて怪我人の脈をさるのみならず、私が指田中佐の救世軍にまつて非常に大切な人であることを告げるのを聞き、殊更大なる注意を以て、できる限りの手當を試みられたからである。(中佐は「さきのころ」の主筆であつたのは、諸君の知らるゝ通である。)

その間も私は東京の各方面にある救世軍の各支部のこゝが氣にかゝるから、折柄本營が全く火になるのを目撃しつゝ、七八人の士官や又かけつけてくれた義勇團員等をして、手分けて、山の手に、下谷、淺草に、本所、深川に、京橋、芝に、麻布にさいふ風に、各小隊及び各事業部の様子を見にやつた。そのあるものは夕方までに、あるものは夜に入つて、それぞれの報告を齎したのであるが、さうも山の手方面を除く外は、「あの社會事業部も焼けた。」この會館もつぶれた。」さいふ風に、何れも面白くない報告にのみ接したのである。

(四)

私は指田中佐の容體の甚だよろしくないこゝを見た。然るに不幸にして彼が近頃轉居した先を知るものがなかつたので、その京橋にある縁戚の許へ使をやり、彼の妻にその事情を通知せんこゝを依頼した。それさへもしや先方へ届かぬやうなこゝがあつてはさ心配し、三遍まで使を發したが、何分大地震の最中、又到る處火事が起つてゐる最中にて、指田夫人の未だ來着せられぬ前、恰度午後二時三十分に、彼は最後の息を引取つたのである。其の初彼を一ツ橋の電車通に横へてゐる際、私が十遍ばかりも大聲に「指田、々々、々々」さ叫んだのに對し、彼は少しくうなづいたさいふ人もあつたが、それさへさうだか判然しない。彼は初、その長い室から釣りおろされた當時、はや無意識状態に陥つてをつたらうと思はるゝくらゐであつた。私は彼の死を慟哭した。しかもこれを奈何さし得なかつたのである。

私は指田中佐その他の士官のこゝを心配する間に、いま一人酒井參軍(社會書記官)のこゝを考へ出した。私は彼がこの朝本營に出勤してをつたのを知つてゐる。或は彼が早く歸宅したさいふ人もあつたが、本營が既に火になつた頃に至り、偶重傷者の一人なる植村參軍から、彼がその日、日中祈禱會の司會者であつたさいふこゝを聞き知つた。して見れば彼は聲も立て得ぬほこの重傷を負ひ、

若しくは即死した儘で、火中に取りのこされたのではなからうか、かく考へ出して、私は立つてももて堪へられなくなつた。私は地だんだをふみつゝ、その事に就いて名刺に數行を書き、これを酒井夫人の許に傳達せしめた。それもこんな場合であるから、間違のないやうに、引續き二人の使を、市外田端の彼の宅まで派遣したのであつた。

その他の怪我した士官方の家々にも、それぞれ使を發したのは、申すまでもない。私共の前後左右には多數の避難者が詰めかけた。中には重傷者も少くない。見てゐるうちに目の前で、女の兒が死に、其の母も亦死んだのなきがあつたが奈何とも致方がない。そこへ救世軍病院から女醫三看護婦が到着した。私共の負傷者に手當をするばかりか、ちよつとした閑を見つけては、馳せゆきて次から次へ、そこらに居る負傷者の爲に手當をする、其の神々しい働振を見て、所謂「白衣の天使」は、眞に彼等の謂だ、心から感佩した。

## (五)

夕方になつて商科大學もその正門の方がまた危くなつたので、指田中佐の遺骸、三人の怪我人を守りつゝ、如水館裏の空地に通れた。そのあたりは一ぱいの避難者で満ちてをつた。そこへ指田夫人が二兒を連れて來られた。乗物がないから、赤坂から神田まで、子供と一緒に歩いて來られた爲に、時をこつたのは止むを得なかつたのである。流石の彼女も後には思ふ存分泣かれたらうが、その當時は涙一滴見せず、雄々しくも言はれた。「噯かし、彼の本望でありましたらう、かうして職分の途上に倒れましたのは。殊にこの數年彼は偏り過ぎはせぬかと思ふくらゐ、救世軍を堅く信じ、その爲に、身も心も打込んでをつたのですから、今かく召されても、彼には憾がなかつたこと、思

ひます。彼は平生あなたの傳記を書きたいといつてゐたのですけれども、それができなかつたのも全く神の御意でありませうか。」

## (六)

私はかうしてゐる間にも、一面には自分の家族のことが氣にか、つて居つた。下遊谷の私共の茅屋は、つひこの頃友人方の厚意により二階に六疊一室を増建して、それに私の参考書を室の三方を圍んで、計五間程の本棚に列ぶやう取計らうたばかりのころである。なにしろ古い家の上に、二階を増建して、それに數十貫目の書籍を列べたのであるから、私は多分この地震で二階が墜ちたらうかと思像した。しかも二階が墜ちたさすれば、乳兒を合せて七八人の家族が悉く無事であつたらうかは考へられない。それ故私は言ふに言はれぬ不安を感じた。しかし私には救世軍人としての職責がある。幾多戦友の生死を目の前にしてゐるのであるから、この際自分に及ぶ限は、それらに對する我が本分を行ひたいと考へた。午後七時に至り、前に麻布方面に遣つて置いた青年士官が私の宅にも立寄つた結果、案外にも一同の無事なる有様を見届け、且妻から、握飯、ビスケット、鹽煎餅、蠟燭等を持ち切れぬほど多く渡され、携へて歸つたのを見、その品々を諸君に提供しつゝ、心の中に神を讚美したのである。

## (七)

それと同時に、私は至急救世軍假本營を、ここかに設けねばならぬ事に心付いた。幸に山の手からの報告に、「四谷、牛込、小石川の救世軍は無事。市ヶ谷の救世軍士官學校も瓦が落ちただけで無

事。『さいふことを聞いたから、それでは兎もあれ明日から士官學校内に假本營を設けやうと決心した。それには同學校の校長と打合せの必要もあるので、あこのことを殊に老練なる二人の士官の指揮に委ね、まさかのさきの手配を及ぶだけしておいて、錦町の火になつてゐるのを見ながら、一士官と共に一ツ橋を渡つて濠端の大變な人ごみの中をかきわけつゝ、九段に出るさ、丁度飯田町の邊が焼けてゐる最中であつた。九段坂を上つてからも、裏道表道を縫ふやうにして市ヶ谷本村町の救世軍士官學校に立寄り、それぞれの取計ひをして後、一先づ下澁谷の我が家に歸り、妻や子供等がお隣の畑に蚊帳を釣つて、避難させてもらうてゐるのに面會した。

後できけば、私とその夜こゝばかりは大丈夫であらうさ、安心して指田中佐の遺骸や、數人の怪我人を、諸君の手に托して去つた商科大學如水館の裏手も、たうさう程なく九段坂下の方からの火が移り、そのため諸君はその後の避難に、言ふことのできない苦勞をせられたさうである。私は彼等にこんな苦勞をさせたことを、深く遺憾に覺える。

## (八)

翌早朝、私はその日から假本營を定めた、市ヶ谷の救世軍士官學校に行き、そこで酒井參軍夫人に面會した。夫人は言はれた。『夫はかね／＼救世軍の制服を着用して死にたいさいふてをりました。今その通になつたことを思ひ、満足に覺えます。しかし大佐、これが大佐でなくてようございませした。大佐が生きてゐてくだされば、救世軍は進みます。一昨日は天長節で休日でありましたから、久し振に二時間ほご、夫と共にその初めて召されて救世軍士官になつたさきのここのなご話し合ひ、神様の恵を感謝しました。そのさき夫が言ひますには、あなたは體が強くないけれども、神様

の御旨ならばこれより以上に慫もならないこと、思ふ。少し氣分がよくなつたら、點字でも稽古して、盲人の友になつてくれたらさうであらう。兎もあれお互は益々世の頼邊なき人、弱きもの、友達にならなければなりません。私は夫の志を繼いで、最後まで救世軍中に忠義を盡させて頂きます。私はかうした場合にも、なほ飽くまで神様に信賴いたしまするさ。』

そのうちに心き、たる一二の士官は、早や本營の燒跡にゆき、酒井參軍の白骨を拾うて來た。彼は例の長い室の中央に、仰臥した儘死んだものらしい。大方大地震の際、さうかした拍子で仰向けに倒れ、そこへ落ちて來た煉瓦が何かで、胸部を撃たれ、一撃の下に息が絶えた上に、更に多くの石や煉瓦がその上に落ちかゝり、その爲、彼の方から助を求めるところが出来ないは勿論、餘り遠くないさころで、他の三人を引出すために稍しばらく働いた私共にも、終にその所在を見出し得なかつたのであらう。乃ち植村參軍の話にも、『私はこゑを上げて救助を求めた、しかし指田中佐は大聲にうめいただけで、酒井參軍に至つては絶えて一語をも發しなかつた。』さいふたのは、そのためであらうかと思像せられる。

## (九)

この度の大地震が日本國民にさり、または救世軍にさつて、どんな意義を有するものかは、私の今何とも言はんご欲するさころでない。しかしながら救世軍は、少くも將來最も有望な二士官を喪つた。私自身さして言へば、彼等は私の死後、私にできなかつた奉仕をなし、私に負ひ切れなかつた重荷を負うてくれる人物であらうと期待したのに、それが今かく急に私共の間からさるゝこととなつたのは、何とも言へない苦痛である。また絶大の損失である。けれども私はかゝる場合にも、

なほ神の誤らざる鑑理を、その愛の大御心を信ずる。  
 私はあらゆる敬意と感謝を先だちゆきし戦友に拂ひ、その猶ひも揃うて雄々しき覺悟を有する二人の寡夫人を助け、他の同志戦友と共に、神のお助を、御導きの下に、更に大に、日本國民の救のために戦はねばならぬ。今の日本國民位基督の救を要する國民といふは、斷じて他にないことを信ずるのである。

### 嗚呼勇士は仆れたる哉

#### 有爲多望なる一士官の昇天

(大正十二年十一月一日、ときのこと)

昔ダビデは其の莫逆の友人ヨナタンの死を悼みて、「嗚呼勇士は戦の中に倒れたる哉、嗚呼勇士は倒れたる哉、戦の具は失せたる哉」というた。私共は指田中佐と酒井參軍との昇天に對して眞に然うした嘆をなすものである。

#### 中佐指田和郎君 (められた志士の典型)

彼は多技多能なる一箇の秀才であつた。彼は文章が書け、演説が出来、英語が話せ、英文が書け、音楽が出来、獨唱が出来、繪が書け、タイプライターが出来、それで置いて主義を取るここの最も堅い、言はず、深められたる志士の典型とも稱へらるべき人格者であつた。

彼は明治十八年二月、日本橋區小田原町に生れた。幼い時から病弱で十九歳まで生きらるゝかこ心配したのを、不思議に達者にして三十九歳の今日迄存へて、御奉仕をさせて戴いたのは神様の恵です。彼の母は涙の中に言つた。六歳の時其の父が經營した指田代用小學校に入學し、後二三度學校を轉じた。中學二年の頃父を喪ひ、暫くは醫師志願で濟生學舎に入つたこもあつたが、後物理學校に轉じたのである。

彼は「平民之福音」を讀んで、救に入つた幾百千人の中の、一人であつた。十七歳の頃叔父と一緒に二回救世軍の集會に出席したこあり、「平民之福音」を求めて、一夜寝ながら之を讀むうち、自分の罪を其の救の道を發見し、起き直つて其の書に教へてある通、悔改の祈をして救に入つたのである。彼は後しばしば證言した所であつた。

救世軍兵士となる間もなく少年軍曹長に任ぜられ、日曜學校を教へた。明治三十八年故高橋參軍の一行に加はり、候補生の資格で濠洲に渡り、それより直ちに英國に赴き倫敦の萬國士官學校に入學、翌三十九年歸朝、書記長官々房に働くこもなつた。

明治四十二年の春「こきの聲」の編輯を命ぜられ、後其の主筆として今日に至つたのである。

彼が倫敦に在つた頃の士官學校々長ハワード中將は殊に彼に望を屬し、卒業の當日彼を中尉に任じ、翌日直ちに大尉に任ぜられた。彼が日本に歸つて後の成功ある奉仕の事が彼地に聞える毎に、中將は「我輩の見た所は違はなかつた」といふて、深く之を喜んで居られたさうである。

彼が如何に眞劍な神の僕であつたかを示すに足る一佳話がある。十二三年前、彼が其の父の遺産整理をした時、思はぬ金が千圓ほこ彼の手に入つた。彼は其の半分を母に呈し、三百圓を他に嫁して居る妹に與へ、二百圓を其の手に残した。けれども考へて見るこ、他の士官の諸君が清貧勤苦の生

活をして居る中に、自分だけ、何ぞの時には、其の二百圓の一部を出して使つて居るやうでは、諸君の苦みを分つまいふわけには行かないと、乃ち其の二百圓をそつくり、神の御用の爲に救世軍に献じたのである。

彼は明治四十四年に大尉高野静子と結婚した。其の間に二人の子がある。彼の二羽の雀を忘れぬ神は必ず此等の遺族を記憶して、之を恵み守り給ふことを信じ、且祈るのである。

### 参軍酒井宗八君（勇敢なる基督の戦士）

イーデー中將は、指田中佐を「聖徒」と呼び、酒井参軍を「戦士」と稱へられた。参軍は實際勇敢なる基督の一戦士であつた。

彼は明治二十年四月大阪に生れ、中學迄の教育を其の地で受けて後上京し、神田の商業學校に通學中、今の戰場書記官ウイルソン中佐が當時神田小隊長として、彼の下宿の窓の下に來ては野戦をする。それに引付けられて終に基督を信じ、救世軍の一兵士となつたのが、明治三十九年末のころであつた。ウイルソン小隊長は其の頃から、さうか神が彼を將來一箇の士官たらしめ給はんことを祈つて居つたさうである。

彼は候補生時代に野戦を營んだ廉を以て拘留せられ、やがて今の東京刑務所に投ぜられたころがある。未決監にて十數人の人々と一緒に居る時、彼は大膽にそこにて基督の福音を宣傳したが、反つて彼等の反感を買ひ、最初には皆から殴りつけられた。けれども後には、人々も彼の熱心と眞實さを認め、靜に其の言ふところを傾聴するに至つた。彼は又出獄後、それらの人々の家庭を訪問して之を慰めなされたのであつた。

明治四十二年、今の植村参軍と一緒に渡英して、萬國士官學校に入學し、翌年の初に歸朝し、司令官附として、各地に轉戦、四十四年中尉安藤松子と結婚した。前橋小隊長たりし時代には其の會館の新築に盡力し、それから士官學校教官に轉じ、八年間其の要職にあり、關西聯隊長より入りて社會書記官に任ぜられたのは、大正九年の初である。

大正九年、倫敦に救世軍の社會事業大會のあつた際彼も之に出席したが、折柄攝政宮殿下御渡英の事あり、彼はブリス大將、マップ中將等に隨つて、我が大使館にて殿下に拜謁の光榮を擔ふたのみか、其の御携帶遊ばされた手蹟帖に記名をさへ仰付つたのであつた。

ジョン、ウエスレーは言ふた、「神は働き人を變へて、其の働きを繼承せしめ給ふ」と。指田中佐も酒井参軍もは斯して其の務を成しをへて御前に歸つた。彼等の後をついで、そののこした事業を行ふ者は誰か。私共は其の人物の續々現れ來らんことを、神に祈つて止まぬのである。

## 大震災に於ける救世軍

（大正十二年十一月一日、ときのこと）

救世軍は此度の大地震によりて絶大の打撃を蒙つた。救世軍は此の種團體また事業の中に、最も大なる罹災者の一つであつた。けれども救世軍は屈托しなかつた。彼等には神から賜りたる彈力があつた。如何に彼等が忽ちのうちに其陣容を立て直し、最も秩序的に、しかもどこ迄も犠牲献身的に、各方面に對つて救護、慰藉、及び教化の大運動を開始したるかを見よ。

大震災、大火災は救世軍に取りても最き大なる打撃であつた。神田の本營及び中央會館を始し、下谷の病院も、淺草及び月島の勞働寄宿舎も、本所の社會植民部も其の他東京及び横濱に於ける多數の會館等も焼失した。併しそれよりも大なる損失は最も有爲なる二士官を喪つたことであつた。けれ共救世軍は沮喪しなかつた。彼等はダビデと同じく「神によりて自らを勵まし」たのである。大震災の翌日、假本營を牛込區市ヶ谷本村町の救世軍士官學校に移し、間もなく災後の特別運動に取りかゝらるゝこと、はなつた。恰度歐洲大戰に於ける英國の救世軍と同じ様に「事務は平常通り」さいふ方針にて、及ぶ限り救靈及び社會事業を、これ迄通に經營しながら、それで措いて、新に災後に對する救護、慰藉、教化の大運動を開始せらるゝこと、なつたのである。

第一に着手せられたのは慰問運動である。塵紙、手拭、木綿反物、シャツ、毛布等より、米、味噌、醬油等の食料品に至る迄種々の日用物資を調達しては、東京市中バラックさいふバラックに住む罹災者を戸毎に尋ねて行つて、温かい情の籠つた慰安の品と共に、之を寄贈した。

九月八日より同月二十九日迄に、救世軍慰問隊が配布したる東京市に於ける戸數は一萬五千二百七十二戸にて、その人員四萬三千六百十一人、配布したる物品は衣類一萬四千五百點、慰問袋五千八百二十四袋、馬鈴薯百十五俵、味噌五十八樽、梅干三十二樽、手拭六千百本、其の他米、罐詰、紙、漬物、野菜等、及び日用品にて其の數もまた頗る多いものであつた。別に上野、日比谷、九段、芝離宮の各バラックに配布したる衣類は四千二百五十點、味噌二十五樽、馬鈴薯三十五俵、梅干七樽、其の他手拭、雨傘、草履等であつた。尙横濱にて配布したる人員は壹萬三千三百五十四人にて、今尙慰問運動を續けつゝある。以上の慰問品に就ては、東京府より非常な便宜を與へられたことを感謝するのである。

第二に着手せられたのは五箇の大集團バラック内にて經營することとなつた、隣保事業であつた。目下東京市直營の大バラックが數ヶ所あるうち、芝離宮ミ、日比谷ミ、九段ミ、上野ミ、青山外苑ミの五箇所に對し、救世軍からそれぞれ逸早く隣保事業（ソーシヤル、セツツルメント、ウォルク）を開始し、事慣れた士官等が何れも數人、バラックの中に入り込んで罹災民の間に住居し、毎日巡回して其の周圍の人々の爲に、なにくれミ奉仕して居る。又其の場所々に救世軍から派遣した巡回看護婦、若くは産婆があつて、之も同じく毎日一軒一軒まはつて歩いては人々の爲に盡して居る。つまり救世軍が此の隣保事業部、即ち所謂「隣保館」を通じて爲さんミ欲する所の事業は、第一、精神的に彼等の間に慰安教化を試むる事、第二、物質的に貧困者救護、生業扶助に盡す事、第三、肉體上に疾苦をいたはりて之を助くる事等、是である。

第三に試みられたのは芝離宮ミ、九段ミ、上野ミに於ける幼児保育園の事業であつた。後に東京に於ける代表的社會事業家が打寄つて、震災後の社會事業として最も緊切なものは何かさいふ問題を相談した時、それは先づ各バラックに於ける幼児保育及び隣保事業であるさいふことに、残らず同意せられた所であるさ聞いて居る。さうせバラックに住む人々は、新しい運命を開拓する爲に、自ら立ち自ら助けて働かねばならぬものであるさすれば、親達の足手纏にならぬやうに幼児を預り、之に善良なる感化を及ぼし、其の心身の健全なる發育を助くるは、何より必要なること、言ふ迄もなく、間接にはまた兒童の家庭に最も親切なる心盡をする所以である。此の保育所では又、日曜日毎に日曜學校を營み、別に折々兒童の親達及び隣人の爲に、講演會、會等の催もありて、最も徹底的に人々の爲に盡して居るのである。

第四、日比谷、丸ノ内、九段等では、市から委託せられて、毎日一石五六斗に達する多量の牛乳を

救世軍の手で病人や、幼児や、老人等に配給し、其の間々には又それを受くる家庭を訪問して之が慰藉救護に力めて居る。

第五、此の號の「ミキの聲」の出る頃までには、下谷中御徒町の病院跡に大きなバラックを設け、今一度そこにて、救療事業を開始して居らるゝであらう。何しろ、多數の人々が不完全な住居に、不自由な生活をして居る事として、此の冬の、彼等の健康状態が如何にも氣つかはれる。此の際救世軍病院の大に活動すべき必要は申上げずとも明かである。ブース大將が米國の救世軍に命じて送らせつゝ、ある多量の藥、醫療機械等も大に役立つべき事、疑がない。

第六、震災後の大問題は言ふまでもなく失業者の救濟である。そこで救世軍は淺草區黒船町と京橋區月島との二箇所を職業紹介所を置き、市、府、その他の該事業と連絡をとりつゝ、極力此の方面にも盡力することゝなつて居る。

第七、家族を容るゝ爲に出來た幾多のバラック以外にも、一つ大切なるは獨身労働者の宿所である。月島の勞働寄宿舎は百人を容るゝに足るべきバラック建にて、此の方面の需要に應ずべく、本所區柳島梅森町の社會植民部の跡に設けられたバラックは、亦保育所及び隣保事業の爲に使用せらるべき筈である。

第八、横濱にては凡て西洋人にして救護を要する者に對し、救世軍は市の特別なる依頼を受けて、盛んに活躍したのである。市にては其の爲に、櫻道の所に大きなバラックを設立し、救世軍からはビッグウッド參軍が出張して、其の運動に全力を傾けたのである。又横濱市民に對する慰藉慰藉の事業は岡島中校が幾回か荷物自動車にて、京濱間を往復しつゝ、下士官兵士に輔けられて、頗る熱心に活動せられ。横須賀に於ける柴山少校は亦同市の罹災者の爲に、必要なる慰問品なき配給しつゝ、

着々有効なる運動を續けて居られる。

第九、府下中野在の救世軍結核療養所は、震災後盛んに頼邊なき患者を收容しつゝ、あり。麻布の婦人ホームには又、急に多數の婦人及び小兒を引取り、平生に三倍する被保護者を世話して居る。牛込赤城下町の勞作館も釋放者の外に、一般労働者を宿泊せしめ、就職及び獨立自營の生活に對する便宜を圖りつゝ、あり。其の他全國各地の支部が直接間接に震災に對する救護及び慰藉に盡瘁しつゝ、ある詳細は、到底之を盡すことが出來ない。

それに就けても救世軍の爲に祈れ、又救世軍の爲に盡せ。神は救世軍を用ゐて其の御榮と同胞の救済の爲に、これ迄にない程の奉仕をなさしめんとして居給ふのである。

### 五拾萬圓の物資を配給す

聖書に、基督が僅に五つのパンと二つの魚を以て、五千人を養ひ給ふたといふ記事があり、其のパンと魚をちぎらるれば、ちぎらるゝほど、それが幾らでも殖えたといふのであるが、私共は大震災後に於ける救護運動に際し、全くそれと同じやうな經驗をしたのである。最初には唯僅か數百圓の物資を手にして、罹災者に配給しかゝるに、忽ち内外各方面から思もよらぬ巨額の物資を寄贈せらるゝあり、後には幾らでも配つてまはれば、其の後から復幾らでも物資を與へられて、次から次へ到底數へ切れないほど、多數の品物を配給し、總計では、みんなに内輪に見ても、少くも金五拾萬圓に値する物資を配給するの便宜を與へられたのであつた。

ここからそれらの物資を與へられたかは、今到底之を詳説するの邊がない。各地の救世軍は流石に

最も早く、それぞれ盛んに金品を募集して之を送り届けてくれたのである。各方面の軍友同情者は眞實をこめた見舞金、救助金品を寄贈せられたのである。震災救護事務局、東京府、東京市、警視廳、神奈川縣、横濱市等から便宜を與へられたことは、至つて多く。三井家から率先して綿毛布一千枚、メリヤスシャツ五百枚、タオル二千枚、麻裏千足、齒磨二千袋、揚子五千本、天幕三個を送贈せられたる如き、殊に其の時機の早かつた丈に、有難さが一倍強く感ぜられた。取扱ふた物品は米、麥、味噌、醬油、梅干、野菜物、粉類、罐詰、食鹽、漬物、ビスケット、マッチ、蠟燭、繻帶、衣類、靴、下駄、草履、下着類、毛布、夜具、蒲團、手拭、タオル、石鹼、藥品、バケツ、鍋、釜、食器類等、殆んどあらゆる生活の必需品を網羅したのであつた。其の諸外國の救世軍、又在米日本同胞等より寄贈せられた丈でも、實に左の如くであつた。

船名	出先	品目	見積價格
天洋丸	米國	衣類毛布ミシン	三六、〇〇〇
天洋丸	米國	自動車二臺	五、〇〇〇
美洋丸	米國	タイプライター七臺	一、〇〇〇
美洋丸	米國	古着七十六箱	七、〇〇〇
ハフロン	米國	藥品	一〇、〇〇〇
靜洋丸	米國	古着二十七俵	二、七〇〇
西比利亞丸	米國	シヤホン	二、〇〇〇
セファソン	カナダ	古着五噸	一、五〇〇
春洋丸	米國	古着三十俵	五〇〇
春光丸	米國	古着十二俵	三〇〇

船名	出先	品目	見積價格
グラナツブ	英國	毛布一萬枚	七〇、〇〇〇
鹿島丸	英國	衣類	四〇、〇〇〇
麗洋丸	米國	古着	一、〇〇〇
パナマ	米國	古着	四〇〇
樂洋丸	米國	荷物自動車三臺	六、〇〇〇
樂洋丸	米國	食料品	二、〇〇〇
樂洋丸	米國	古着五十噸	一五、〇〇〇
エシヤ	カナダ	古着	五〇〇
カイバ	カナダ	古着	二〇〇

見積價格計金二十萬一千一百圓也

在米の我が同胞は數萬圓の物資を集めて、直接私共に送つてくれると共に、亦數萬圓の金を作り、倫敦の萬國本營を通じて、私共を援助してくれたのである。其の上に彼地の救世軍日本人部から男七人、女二人、計九人にて救護班を編成し、私共の救護運動を援助するために、出て来てくれたのは、時に取つて非常なる便宜であつた。其の一人は加州大學在學中の學生であつたが、學業を抛ちて、一臺の自動車を携へ來り、自分から其の運轉手となりて、盛んに活動してくれたのである。他の一婦人はミシンを使用するに堪能の人であつたが、在留同胞から寄贈の二十五臺のミシンを持つて來て、こちらの婦人達と一緒に、盛んにエブロンや、下着なご作り、配給の便に供してくれたのである。

物資配給の範圍は、東京市、府、神奈川縣、千葉縣等を、主としたのではあれど、同時に埼玉、靜



岡、愛知、京、阪、神、其の他各地にて、罹災者、避難者等の爲に、其の地方救世軍人のそれぞれ活躍した多大の勤勞は、決して之を忘れてはならないのである。

### 臨時の震災救護事業

#### 隣保館と保育所との事

救世軍に於ては、救護事業にあらざる社會事業がなく、社會事業にあらざる救護事業がない。それであるから、大震災のやうな場合には、其の有する各社會事業部は言ふ迄もなく、あらゆる小隊、聯隊が、何れも總立になつて、それぞれ及ぶ限り、罹災者、避難者等の爲に、盡瘁したのは言ふ迄もなきことながら、其の際私共が、殊に應急的に、臨時震災救護の爲に開始した社會事業は、物資配給運動を外にしては五箇の隣保館と、三箇の保育所とであつた。

#### (上) 五箇の隣保事業

取敢ず九段ミ、芝離宮ミ、青山外苑ミ、上野ミ、日比谷ミ、五ヶ所の集團バラックの中に隣保館を置き、心き、たる士官(多くは女士官にて、間々夫婦者の士官を用ゐたのである)に産婆、若しくは看護婦を附し、第一には精神的に、慰め、勵まし、教へ導く事。第二には肉體的に、怪我人の手当をし、病人を看護し、妊婦産婦を世話するなご、凡て衛生上から力を盡す事。第三には物質的に、絶對入用な物資を供給し、又は職業上の相談相手になつて、其の生活の安定をはかる事。この三つの目的を以て、集團バラックの住民を戸毎に訪問しつゝ、盡力することゝなつた。それらの成績を數字にて示せば、ざつと次の如し。

名 稱	九段隣保館	芝離宮隣保館	青山隣保館	上野隣保館	日比谷隣保館	合 計
期 間	二、九、一七より	二、九、一五より	二、九、一〇より	二、九、一五より	二、九、一四より	
訪 問 時 間	一三、三、八まで	一三、九、四まで	一三、二、一四迄	一三、一、一八迄	一三、一、一〇迄	
訪 問 せ し 戸 數	一四、四〇八	一六、四六九	六、〇七八	五、五七一	二、三、五二七	八、七一九
大 人 の 集 會	三七	一六三	二二〇	二一〇	二〇七	八三七
同 會 衆	三、七三三	九、八四〇	六、七三〇	二、〇四四	一、六七四	三九、〇二一
青 年 の 集 會	三二	一三二	一一七	二八七	一一三	六九一
同 會 衆	四、七五九	一八、八七九	一四、〇三八	一一、五五〇	一、六四〇	六一、八六六
志 道 者 (大 人)	六二	五〇一	二二四	一一七	四一九	一、三二三
兵 士、准 兵 士	—	一〇六	六一	三九	一九二	三九八
日 曜 學 校 生 徒	二〇〇	七〇九	三八一	二一	七三八	二、〇四九
志 道 者 (青 年)	—	一六一	二六三	四三	七五	六四二
身 の 上 相 談	一九	一、三一〇	一一八	一〇	二一	一、四八八
職 業 紹 介	五六八	六四二	一六〇	二三三	五、六三二	七、一三五
物 資 供 給	一五、六二二	二一、八二七	一一、九二三	一一、五六六	一五、九七四	七六、九一二
病 人 看 護	七四〇	七一五	一、八九八	五七三	六四七	四、五七三
病 院 へ 紹 介	八	六七	一四一	一七	八	二四一
葬 式	—	三〇	六	—	—	四〇
妊 婦 診 察	—	—	六二五	四二	六三	二、〇二八
助 産 産 婆	—	—	七六	二九	七四	二二六
文 書 の 配 附	三、九三六	四、一二六	八、三〇二	六、五〇三	五、一七九	二八、〇四六

此の以外に附屬運動として、四谷傳馬町の清水齒科醫に請ひ、青山隣保館にて引續き無料齒科治療をしてもらったのや。又は麻布笄町の渡邊理髮店其の他有志の贊助を得て、同じく青山隣保館にて無料理髮を行ふたる如き、何れも其の住民の感佩する所であつた。家庭學校の鶴見欣次郎氏は九段隣保館にて毎度慰安講演をしてくれたのである。

別に委託を受け、日比谷で牛乳を配給した成績は左の如し。

其の期間 大正十二年九月十日より十二月二日まで

其の容積 六十七石五斗

延人員 三萬〇六百四十七人

或時芝離宮のバラックに住む一人の男が、二三週間旅行をして歸り、上着を脱いで投げ出しておくのを、其の妻が折目を正して覺まうとするに、衣囊から金二十圓の紙包が出て來た。「もしもし此のお金はさうしたのですか」を尋ねるに、夫は答へて「それはお前にあげる金だ。旅をする前に、お前が救世軍に行つて、信仰に入つたといふから、みんな眞似をするかを見て居つたら、お前は私の妻には有難過ぎるほご立派な婦人になつてくれた。お前がその心がけなら、私も負けないやうに眞面目になつて、一緒に復興せねばならぬと思ふから、今度の旅行中は、好きな酒を一滴も飲まず、また無駄な金は一文も費はぬことにして、圖らず出來たのが其の二十圓だ。それはお前にあげるから、さうか其の精神で、此の上にも一緒に勤めてもらひたい」を言ふたさうである。

青山の神宮外苑のバラックに、さうしたものだか、恐ろしい救世軍の嫌な一婦人があつた。しかし出産の間際になつて、他に仕方もないので、平牛嫌で堪らない救世軍の隣保館に引取られたのであつた。それにしてもこんな扱を受けるものか知らん危んでゐるに、食事時になり、米の飯に肴を副へて食べさせた。はてな救世軍は質素節約を旨とする團體だなどといふけれ共、さうせ一文も拂はないと定まつてゐる私に肴まで食べさせず位では、案外贅澤にやつて居るのかも知れない。好い機會だ、一つ内幕を見破つてやらうに、恰度隣の室で受持の士官夫婦が飯をくひ出したやうだから、のびあがりののびあがり、障子の隙間から窺いて見るに、夫婦差向で食事をして居るお膳の上には、唯菜葉しかないのを見て、其の婦人の邪慳な心は挫けた。あの人は震災後、夜を日に嗣いで車輪のやうになつて働きながら、自分達は菜葉ばかり食べて、一文も拂はない私には、お産前だからといふて、力をつける爲にお肴を食べさせたものだと思へば、あの人は本氣で人助の爲に盡して居るのに相違ない。私はこれ迄それ知らずに、思ひ違へて居つたのである。其の婦人は間もなく救世軍の産婆の手で安産をしたが、同時に其の邪慳な心も直り、大層穏和な人間になつて、其のバラックに引取つたといふことである。

### (下) 三箇の保育事業

大震災でひどい打撃を蒙つた人達が、復興するには男子が稼いだ丈では足りない。婦人も一緒になつて働かねばならぬ。所謂夫婦共稼の必要があるとして、可愛さうなのは、足手まじひになる子供らである。之を放抛しておいたのでは、心身共にとんだ悪影響を蒙り、十年十二年の後には、如何なる病少年又は不良少年等を輩出しないものにも限らない。何か其の爲に盡したいと思ふて居る矢先へ、雑誌「主婦の友」の石川武美氏から、何か子供等の爲に使うてくれるやうにさいふで金五千圓の御寄贈があり、心から感佩しつゝ、それを資金として、早速芝離宮に、やがて日比谷に、九段に、それぞれ児童保育所を設置することに、なつた。日比谷に、九段の分に對しては、震災救護

局、警視廳當局者から其の設立に關する便宜を與へられた所が、多かつたのである。其のざつとした成績は左の如し。

名稱	九段	芝離宮	日比谷	總計
期	一一、二〇、一八より 一三、九、二七まで	一一、九、一五より 一三、一、一三迄	一一、二、一、九より 一三、一〇、一九迄	—
兒童出席數	一六、四二四	二八、〇八七	七、四二六	六一、九三七
家庭訪問時間	四九五	六三一	八二四	一、九五〇
家庭訪問戸數	二、六二一	七、七三八	四、八〇一	一五、一六〇

保育所に於ける父兄會、又隣保館に於ける講演會、救靈會等を通じて、罪を悔改め、救に入り、やがては救世軍兵士となり、集團バラツクを取拂はれて後の今日まで、眞實を以て道を歩んで居る人も決して少くない。左に掲ぐれば、當時日比谷のバラツクに住んだ一少女から來た手紙である。

はいけい先日色々な物を下さいましてほんとにありがたう御座いました。私は年をとつたおばあさんと二人です。おばあさんは病氣でこのあいだ死にました。九月の或る日、日比谷で二人でこまつて居りましたら、若い女の人が來て色々私たちの事をきいてかはいさうだからと言つてお金を三圓下さいました。その時は私たちはお金なしでこまつてしまつたが、その方からいただいたので、ほんたうにうれしくて泣きました。それをいたゞかなければ死ぬつもりでした。それからおばあさんが病氣になつたので、しばいして居ましたら又來て下さいました。そしておいしやさんも呼んでたくさんのお菓子も下さつて又一圓五十錢を下さいました。おばあさんは毎日泣いて居ました。私たち二人のよころびは申上げられない程うれしくてうれしくてよろこびました。四五日たつてからまた來て下さいました。おばあさんが名まへなとやかましくまをしましたら、私は救世軍の山むろさんに居るものですと申しました。おばあさんと二人

でだいてよろこびました。そのうちモーフを救世ぐんの人からもらひましたから、あの人がたのんで下さつたからだと思ひました。おばあさんは色々お世話になつたその人のことを死ぬまで言つてよろしくと言ひました。

### 救 療 事 業

救世軍の救療事業としては下谷區仲御徒町に救世軍病院があり、大正十一年五月末には長くも 皇后陛下から御名代さして大森男爵を御差遣あらせらる、やうな榮譽を擔ふたのであるが、不幸にして大震災の爲に全部焼失した故、取敢ず震災救護局より拜領した六十坪のバラツクを建て、今日迄其の事業を繼續して居る。其の成績は左の如し。

(大正十二年十一月十二日より同十四年三月三十一日迄)

- 一、外來患者(男) 一五、八六一 一、外來患者計 二九、九三二
- 二、同 (女) 一四、〇七二 一、右延人員 九〇、三九七

此の病院の復興に對しては、幸に内務省より金九萬圓、大震災善後會より金七萬圓(内金四萬圓建築費、金三萬圓設備費)の補助を戴いた上に、倫敦の萬國本營からの補助、及び舊い土地の賣價等を合せ、約金三十萬圓を投じて日ならず、もつと廣い地所に、これ迄よりも遙に完備した一病院を設立すべき筈である。

府下中野在和田堀ノ内村にある救世軍療養所は、専ら結核療養の目的を以て設立せられたものであるが幸に火災を免れた。(無論或程度の損害はあつたが) しかも震災後愈々此の種事業の需要、其の

急を告ぐるものある折柄、幸に内務省から金二萬圓、最近には又御慶事記念、慶福會から金五千圓の御補助を拜受し、震災後既に一病棟を増築した上に、近く更に一病棟を新築すべき計畫である。目下ベットの数は百五十、東京府よりは六十名以内の委託患者を送らるゝ、こゝゝなつて居る。大正十二年大震災後、同十三年末迄の成績は左の如し。

一、前月より繰越	八二	一、入院延人員	四二、九七三
一、入院 數	三〇八	内、有 料	一七、九九一
一、退院及び死亡	二九五	施 療	八、四九七
一、年末現在員	九五	委 託	一六、四八五

爰に療養所の一患者が、自分でした、めた實驗談がある。即ち左の如し。

### 肺病と基督教

救世軍療養所 K H 生

肺病、肺病、何といふ忌ばしい名であらう、何といふ恐るべき病であらう、此の病氣に冒されたら最後凡ての幸福は奪ひ去られ、前途の希望は全く失せて、凡ての人々より白眼で視られ、唯暗黒の死の手のみ吾を待ち迎へて居るのである。

嗚呼誰か眞紅の血を吐きし時、恐怖と絶望の淵に沈まざる。來る日も來る日も、咳嗽に、氣味の悪い血痰に悩まされて、誰か悲嘆の涙に暮れざる。誰か死の目前に迫るを豫知して戦かざる者あらんや。

然れども生の執着の力は強い。目前の死を知りながらも、生きんとするの力、その力に依りて、こゝに最善を盡しての療養は開始せらるゝのである。それには私は先づ醫師に依り頼んだ。博士に信頼した。そして其の診療を受け、命令を守つた。然し病勢はなかなか衰へず、恢復も捗々しからぬ。何々博士發見とか創製とかいふ、注射液にも信頼した。だが駄目だ。

轉地、轉地、迷ふて居る私には、天來の福音の如く、響いた。私は轉地に唯一の希望をつないで、東海の漁村、雄大なる大平洋を朝夕眺め、白砂青松の裡にオソンの氣一杯漲る理想的な地に、五ヶ年間療養生生活を續けた。だが駄目だ。勿論滋養にも信頼して經濟の許すかぎり、あらゆる滋養食料品の廣告に眼をさらし、轉地後は豊富な魚肉に、新鮮な鶏卵に、ヴィタミンAに信頼した。だが矢張駄目だ。依然として肺病である。其の内あの大震災で療養費を保證して呉れた人が、焼け出されて了うた。

嗚呼萬事休す矣、私は限なく世を呪ふた。僅少なりと雖も持てるもの凡てを數年の療養費に殆んど蕩盡して了うた。私は凡てのものを奪はれて了うた。そして金、金、金さへあればと思つて金のない事を呪ふた。凡てに私は絶望した。醫師に、薬に、注射に絶望した。轉地に、滋養に絶望した。そして人間に、金に絶望した。そして絶望と呪詛とで眞闇な心になつて、當療養所に導かれたのである。

愛ある所に神在り。私は凡てに絶望して愛ある神を知つたのである。私は癒へんことを希はなかつた、寧ろ死を希ふた、だが此のひがんだ心、碎けた心を、少しでも纏めて死にたかつた。

ベットの上にある身にも院長先生の熱烈なる説教をとほし、看護婦諸姉の親切なる行爲を通して、私のひがんだ乾からびた心も油然として潤ひ、眼には涙が溢り溢れ、頬につたうたのであつた。

聖書馬太傳九章二十節と、路加傳八章四十三節とに、十二年血漏を患つて居た婦人が、醫者の爲に其の財産を悉く費しても癒へず、イエスに來り癒されたといふ條を讀んで、私によく似て居ると思つた。

私は過去の生活が、悔いられて來た。過去の私の精神、魂が依り處なく、生活に根本がなく、唯病氣が癒へたいといふ事のみ考へて精神生活は零であつた。醫者に、薬に、轉地に絶望したといふものゝ、それは要するに私の精神が成つて居なかつたからである。精神の平安なくして、何ぞ身體の安靜が得られやうぞ。田園閑靜の地にありながらも、帝都の盛榮に憧れる心に、友人の成功を羨望する心に、何ぞ轉地の効果があり得やうぞ。

凡てのことを私は悔いた、そして凡ての事を感謝する心になつた。こゝに導かれる動機となつた大略血に

感謝した、震災に感謝した。私の心はだんだん明るくなつた。先生の説教がしつくりと胸にこたへる、始めて本當の話を聴く心持になつた。肺病なぞ問題でなくなつて来た。そして何だか嬉しい気分が胸の裡に滾々と湧き出して来る。そして私は始めて平安といふ気分を味ふことが出来た。

發病當時G病院に一ヶ月餘入院して居た時の私の心は、どんなに高慢で、亂暴であつたらう。看護婦さんを困らせ、親を泣かせ、自暴と憔悴との裡に悶々として、廣野を駈け廻る如き心であつた。それにくらべて今日の静けき心。金はない、だが心配もない、明日の事を思ひ煩らばない。病氣を忘れた、癒へやうと癒へまいと、そんなことは問題でない。此の六尺のベットは私の天國。

だが死なないと定まつたら少しは動きたい。その動きたいといふ動機も、以前に抱いて居た思想とまるで違ふ。もし神に於て私の體力を許し給ふなら、私は黙つて動きたい。

私は凡ての肺患者が、其の持てるものをつかひ果して、醫者に、薬に愛想をつかして、この如き性質の病院に導かれたら、どんなに幸福であらうと思ふ。

終に私は、存在さへ知らなかつた此の療養所に導かれた事を、感謝して言ふ。  
救世軍療養所は愛の刑務所  
院長は愛の典獄

看護婦さんは愛の看守  
あゝ幸福なる哉、吾は愛の囚人。

### 婦人救済と育兒

#### (一) 東京婦人ホーム

麻布廣尾の婦人ホームは幸に震災を免れた。去四月十六日(木)の午後は内務大臣若槻禮次郎氏が鈴木參與官、川崎警保局長、川原田社會局第一部長等と共に之を視察せられた。其の大正十三年中に於ける收容者は左の如し。

前年度繰越人員 廢業藝妓 廢業娼妓 警察少年審判所 及び刑務所より 親戚知人の委託 再入舎 嬰孩 被虐待兒童 年末現在員 計	大正十三年中收容者延人員				計
	十八歳未満	二十歳未満	二十五歳未満	二十五歳以上	
九	一五	一五	一	三〇	
一	二	一	二	二〇	
一	九	四	一	二六	
八	五	七	二	二〇	
一	九	二	二	二〇	
〇	五	二	一	二二	
一〇	一	六	一	二二	
四	三	五	一	三三	
一	一	五	〇	三七	
計	八、六四一				

#### (二) 女子希望館

大阪の野田町にある女子希望館は又、不幸なる少女及び婦人を收容して保護するところである。其の大正十三年度に於ける成績左の如し。

一、前年より繰越人員	六	一、再入館の數	二
一、裁判所より引取りし數	一	一、家族に引渡せし數	一五
一、警察署より引取りし數	一	一、他の救済機關に送りし數	一
一、少年審判所より引取りし數	一	一、無斷退館の數	八
一、廢業娼妓の數	六	一、年末現在數	六
一、親戚知人より委託せられし數	三		

三四

(三) 大連育兒及び婦人ホーム

大連市播摩町にある我が育兒及び婦人ホームの大正十三年に於ける概況を擧げんに、其の婦人の部に於ては

一、前年より繰越人員	五	一、歸國せしめしもの	四
一、新に收容したる數	一五	一、親戚知人に渡せしもの	五
内、市役所より委託	二	一、就職せしめしもの	二
藝妓なりしもの	一	一、死亡せしもの	一
警察より引取りしもの	一	一、現在收容中のもの	八
其の他	一		
其の兒童の部に就ては、			
一、前年より繰越人員	三九	市役所より委託	一
一、警察より收容せし數	一	再收容	一
一、母と共に引取りし數	四	其の他	一

内、父死亡のため	三	一、親權者に渡せし數	一
生計困難のため	一	一、親戚知人に渡せし數	一
一、兒童のみ引取りしもの	二	一、就職せしめしもの	三
内、父死亡のため	六	一、養子に遣したるもの	四
母死亡のため	一	一、母と共に歸國せしめしもの	一
兩親死亡のため	一	一、現在收容中	三六
母病氣のため	一		

此等兒童の年齢は一歳から十七才迄にて、内男十七人、女十九人である。其の學校關係は尋常小學十九人、高等小學三人、高等女學校三人、商業一人、中學一人である。この間東京婦人ホームに收容した婦人に、次の如きものがあつた。

さく女は淡路島の石屋が澤山ある處で生れたといふより以上に、其の郷里がわからない。幼い時父に死別れ、やがて母が流感で死んだ。其の姉が兵庫縣西ノ宮に嫁して居るのへ、近所の人々が電報うつてくれたので、其の姉が来てさく女を連れて歸り、間もなく學齡に達した故學校に入れてくれたが、其の歸に途に迷ひ、うろろして居る所へ通りかゝつたのが紙屑拾の婆さんであつた。姉の名も、其の所番地も知らないさく女は、婆さんが「私と一緒に歩いて」といふから、其のあとについて神戸市の或裏長屋に行つた。婆さんには内縁の夫があり、それは竹細工の箕直しをして歩く山窩であつた。それから後さく女は婆さん夫婦に伴はれて金屑拾となり、紙屑拾となり、十一歳の時子守にやられた。續いて藝者屋に奉公にやられた。あまりつらい所から通出して遠く茨城縣龍ヶ崎の或酒屋に奉公する迄には、餘程入りくんだゆきさつがあつたものらしい。其處で金を盗み、屏をのり越えて通出し、淺草で牛飯屋に住込んで居る處を、例の婆さんが探し當て、今度は向島の寶屋といふ暖味屋へ七年の年季、二百二十圓の前借で賣飛された。之は十四歳の初夏のことである。

三五

婆さんはこれ迄も、同じ様にどこかで拾ふて来て数年育てた娘を二人、豊穡で藝者に賣つたことがあるさうである。實屋では彼女を強ひて客に接せしめ、處女だといふては幾度も客をとらせたが、それにも拘らず十五歳の春迄に借金は追々増して三百五十圓に達したといふのである。餘りつらいから遁出して、もと同じ店に居た年長の女で今は情夫と同棲して居る者の處にゆき、そこで教へられて救世軍にたよつて来たのである。ホームに入つて後も、最初の内は嫉妬心強く、立聞などする癖があり、あまつさへ花柳病にも罹り居りて中面倒であつたが、辛抱して之を教へ導き、夜學校に通はせ、又段々に之を信仰に導くと、いつの間にか彼女にも案外無邪氣な、少女らしい性質が芽をふき出した、尤も其のうち例の婆さんがきく女のホームに居ることを突きとめ、「コツツ酒屋を開業するから歸つてくれ」といふて来たが、本人が飽迄拒絶したので、案外都合よく之を撃退することが出来た。今現に警察を通じて、西ノ宮の姉の處をも探索中であれど、まだ判然したことが分らない。きく女は今では或堅氣な先に奉公して居る。此の間奉公先からよこした手紙には、聖書にある「汝凡ての道にてエホバを認めよ、さらば汝の道を直しく給ふべし」といふ句など書添へて、以前と異なる今日の幸福を感謝して居るのであつた。

### 釋放者保護

釋放者保護事業は東京の勞作館ミ、大阪の希望館ミで之を營んで居る。尤も東京婦人ホームミ、大阪の女子希望館ミは、必要に応じて婦人の釋放者を收容保護して居るのである。

#### (一) 勞作館 (東京)

勞作館は東京牛込區赤城下町にあり、大正十三年度に於ける事業は左の如し。

一、前年より繰越人員	二二	退館を命じたるもの	六
一、新に收容したるもの	四一三	無断退館	七〇
一、保護を解きたるもの	四二四	再び人監したるもの	二
内、就職せしもの	二〇五	病院に送りたるもの	二
親戚知人に渡したるもの	一三四	現在保護中のもの	一
他の救護機關に渡せしもの	五	收容したる延人員	五、四四七
以上は直接保護を加へた數であるが、其の間接保護を加へた數は次の如し。		一、保護を解きたるもの	七二
一、前年より繰越人員	一一一	現在保護中のもの	一〇五
一、新に保護したるもの	五六	親戚故舊の許迄同伴せしもの	三三
其の一次的保護を加へたるものは次の如し。		生業扶助の數	二八
一、釋放の際一時宿泊せしめし數	四六	停車場其他途中迄同伴せしもの	三四
一、保護者を呼寄せ引渡せしもの	三六	家族又は被害者と融和をばかりしもの	三〇
一、他人に紹介せしもの	三五	被保護者の家族を扶助せし數	五六
一、他の保護機關に移せしもの	五	計	七二〇
一、職業を紹介せし數	五三		
一、衣食旅費雜品を給與せし數	三七五		
爲に刑務所を訪問したるもの次の如し。			
一、訪問又は出迎に費せし時間	四〇七	一、訪問又は出迎したる人數	一六七

#### (二) 希望館 (大阪)

希望館は大阪港區泉尾町にある。其の大正十三年四月から十四年三月に至る一年間の釋放者保護の成績を見るに、其の直接保護の状況は次の如し。

一、前年度より繰越人員	一〇	一、病院に入れしもの	三
一、此の一年の新收容人員	一六一	一、他の保護機關に移せしもの	三
一、就職せしめし數	六五	一、無斷退館せしもの	二四
一、親戚知人に渡せし數	二九	一、再入監	一
一、國元へ送還せし數	一一	一、繰越人員	一一
一、舊主人に渡せし數	二二	合 計	一七一

其の間接保護の状況は次の如し。

一、金錢を以て助力せしもの	一八	一、生業扶助をなせし數	三二
一、衣服を給與せしもの	一七	一、仕事を紹介したる數	四一
一、宿泊せしめしもの	三三	合 計	一四一

尙大正四年十一月、希望館設立以來、九年五ヶ月間に、收容して保護を加へた數は二千五百八十三名、此の延人員は五萬五千〇四十五名に達して居る。  
大正十二年三月以來設立したる宿泊部には、主として勞働階級の人々が宿泊して居るのであるが、其の成績は

大正十二年三月より十三年三月迄（二年一ヶ月間）	八、九五八
大正十三年四月より十四年四月迄（一年間）	九、六六九
計	一八、六二七

さいふいかになつて居る。

司法省にては救世軍の此の方面の事業を認められ、昨十三年三月、司法大臣より其の事業代表者として山室軍平を表彰せらるゝこととなつた。

東京市神田區一ツ橋通町 山 室 軍 平  
 夙ニ救世軍ノ帷幄ニ參劔シ博愛人道ノ主義ニ據リ終始一貫濟世救恤ノ事ニ從ヒ明治二十九年十月救世軍勞作館ノ前身タル出獄人救濟所ヲ創立シテ釋放者保護事業ニ着手シ爾來諸種ノ司法保護機關ノ設立ニ盡瘁シ同軍ヲシテ今日ノ成果ヲ舉ゲシメ累犯ノ防遏ニ寄與セシ功績鮮カラス依テ茲ニ金杯一個ヲ授與シテ其ノ功勞ヲ賞シ併セテ今後一層精勵事ニ當リ事業ノ完成ヲ期セムコトヲ望ム  
 大正十三年三月十九日 司法大臣 鈴木喜三 郎

### 勞働寄宿及び職業紹介

#### (一) 自 助 館 (月島)

救世軍月島勞働寄宿舎は明治四十四年の創立にかゝり、此の種の事業としては、最も舊い部類に屬する。それが大震災の爲に焼失したに付、取敢ずバラック建にて其の働を繼續して居つたが、區劃整理の關係上、これ迄の月島通八丁目から、同東仲通三丁目に移轉せねばならぬ事となつた。乃ち復興局から借地權補償やら、移轉費やらに交附せられた金一萬三千圓を、別に東京府知事より委託經營として建築費、初度調辦費等金二萬九千八百五十圓を交附せられたのこを使用し、二百八十五坪の敷地に、木造二階建スレート葺、計三百一十一坪五合の建物を新築し、優に百人を宿泊せしむべき設備を得たのである。これは大正十三年十二月のこであつた。爾來改稱して自助館と呼ぶこととなる。左に掲ぐるは其の大正十三年一月より十四年三月末迄の成績である。



- 一、前年より繰越人員
- 一、其の以来入館人員
- 一、同退館人員
- 一、現在收容者
- 一、食事供給数

五六  
二六四  
二四一  
八〇  
三五二

- 一、求職者の数
- 一、就職者の数
- 一、集會を營みし数
- 一、改心者の数

一九、〇〇二  
一五、三七七  
一四六  
二〇

四〇

(二) 努 力 館 (三河島)

淺草區黒船町に設けありし、救世軍箱船屋は、同じく労働寄宿、職業紹介を行つて居つたのであるが、大震災火災の爲に焼失したるにより、バラック建にて、手狭ながら、兎も角事業を繼續して來た。其の震災後、大正十四年三月末に至る成績は左の如し。

- 一、宿泊者の数
- 内、有料宿泊数
- 無料宿泊の数
- 一、求 人 数
- 内、男子の部
- 女子の部
- 一、求 職 数
- 内、男子の部
- 女子の部
- 一、紹 介 数

七、二三五  
六、二七七  
一、〇五八  
五、九二八  
五、五三八  
三九〇  
五、一五六  
五、〇一二  
一四四  
四、〇六六

- 内、男子の部
- 女子の部
- 一就 職 数
- 内、男子の部
- 女子の部
- 一、集會を營みし数
- 一、會衆の数
- 一、改心者の数
- 一、食物を給與せし数
- 一、物資を給與せし数

三、九八九  
七七  
三、四七八  
三、四一二  
六六  
四五二  
五、一四一  
四八三  
三五一  
一七四

然るに何分土地が狭いので、何ミか今少し廣い所に出て、大な奉仕をしたいと願ふ折柄、内務省より、金二萬圓の補助を戴きたるを幸に、府下三河島町字辻元二百二十坪の地所を借入れ、木造二階建、亜鉛葺、建坪百六十坪の家屋を新築し、黒船町から其の方に移轉することとなり、これ迄の箱船屋といふ名稱を改めて、之を努力館と呼ぶに至つたのである。これは大正十四年五月末のことであつた。

(三) 民 衆 館 (横濱)

民衆館は横濱市南吉田町にあり、神奈川縣より委託簡易宿泊所として、大正十三年十二月の設立にかゝる。木造二階建、計二百十九坪のライト式建物である。其の爲に縣より交附せられた建築資金初度調算費等は計金三萬三千八百八十八圓であつた。百二十人を宿泊せしむることが出来る。之は此度全く新に着手した事業であつた。其の成績は大正十三年十二月より翌十四年三月末迄四ヶ月間の宿泊者、計一萬〇三百四十九名に達して居る。

隣 保 事 業

本所區柳島梅森町にある、社會植民部は、元來東京府社會事業協會委託事業として經營し來つたのであるが、亦大震災火災の爲に全部焼滅した。そこで焼跡へ六十坪のバラックを建て、殊に兒童保育を中心として、隣保事業を經營し續くる内、更に東京府知事より建築費、初度調算費、經常費等計金六千六百圓の補助を得て、去四月中、更に木造二階建、建坪四十八坪の一棟を増築し、前よりも

餘程便利に此の事業を經營し得るこゝに、なつた。其の大正十三年度に於ける事業成績は次の如し。

- |   |        |               |     |
|---|--------|---------------|-----|
| 一、保育兒童出席數   | 二二、六五一 | 一、ミシン及び編物傳習の數 | 九〇六 |
| 一、輕症病者加療數   | 一、〇五七  | 一、其の他の内職傳習の數  | 五三  |
| 一、日曜學校生徒出席數   | 七、七五五  | 一、人事相談の數      | 二七七 |
| 一、親の會出席者の數  | 一、五五二  | 一、活動寫眞會出席者の數  | 六〇〇 |
| 一、講演會出席者の數  | 一、五七〇  | 一、林間主婦會出席者の數  | 二七八 |
| 一、家族を訪問せし數  | 四、一一一  | 一、クリスマス出席者の數  | 五二八 |
| 別に此處から配給した物資は、毛布、蒲團千百枚、衣類三千點、木炭百俵、味噌二石、乾物類四十五箱、パ<br>ケツ、洗面器、鍋等千點、穀類五俵、慰問袋千箇、エープロン、パンツ等三百五十點、玩具五百箇、鉛筆三<br>箱等であつた。 |        |               |     |
| 此の部より或時は兒童を荷物自動車にて動物園に連れ行き、又は郊外にて新鮮な空氣を吸はせて居る、又或<br>時は主婦たちを林間に乳兒つれて休みに行かせなどして、大に其の地方で有難がられて居るのである。              |        |               |     |

### 多方面の活動

#### (一) 身上相談部

- 神田區一ツ橋通町救世軍本營内に設けられて居る、人事相談部の大正十三年度に於ける働は次の如し。
- |             |     |            |    |
|-------------|-----|------------|----|
| 一、心靈上の問題に關し | 二四〇 | 一、異性の問題に關し | 六三 |
| 一、職業上の問題に關し | 四三五 | 一、搜索の件に就いて | 七四 |

- |  |     |       |       |
|--|-----|-------|-------|
| 一、求人の方に就いて   | 一四九 | 一、其の他 | 三二九   |
| 一、金錢問題に就いて   | 一七四 | 計     | 一、七一〇 |
| 一、收容保護に關し  | 一五五 | 内、男   | 一、三三一 |
| 一、疾病の件に就いて   | 九一  | 女     | 三七九   |
| 此の部を通じて管に身の上に適切なる忠告を得るのみならず、罪よりの救に導かれ、永遠の生命に<br>入りつゝ、ある者も、決して少くないのである。 |     | 子     |       |

#### (二) 警察刑務所掛

本營内に設けある警察刑務掛婦人部の働は左の如し(これは大正十二年以降、十四年四月末に至る報告である)

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 警察訪問         | 刑務所訪問        |
| 一、警察を訪問せし回数  | 一、刑務所を訪問せし數  |
| 一、其の爲に用ゐし時間  | 一、其の爲に用ゐし時間  |
| 一、取扱ひたる件數    | 一、刑務所にて會見せし數 |
| 一、引取りたる婦人の數  | 一、引取りたる婦人の數  |
| 一、婦人ホームに送りし數 | 一、婦人ホームに送りし數 |
| 一、夫の許に送りし數   | 一、夫の許に送りし數   |
| 一、親元に送りし數    | 一、親元に送りし數    |

#### (三) 婦人救濟掛

主として娼妓藝妓廢業の相談相手たることを目的とする婦人救濟掛の、震災直後より大正十三年末に至る活動は左の如し。

(大正十二年九月—十二月) (大正十三年)

一、相談を受けたる数	一三九	三〇五
内、直接本人に面談せしもの	五四	一二九
本人よりの書面によるもの	二〇	二六
家族及び知人と面談せしもの	五	六六
家族及び知人よりの書面により	六〇	八四
一、其の結果		
本人に忠告し自分で處置したる者	四七	一〇九
婦人ホームに引取りしもの	七	二〇
家族及び知人に面談忠告を與へしもの	五	六六
本人、家族、知人に書面にて忠告せしもの	八〇	一一〇

#### (四) 旅客の友部

重に上野驛の邊に出張して、田舎から出て来た人々、殊に年の若い婦人などの相談相手となる「旅客の友」の運動は、大正十三年度に於て概略左の如し。

一、驛に出張の回数	一〇九	一一七
一、同時時間	五四六	五八
一、訪問の回数	二九	
		一、取扱の件数

#### (四) 年末餅賣

大正十二年の暮は、あの大地震の後、バラツク住の人々の多い際であるから、殊に雑煮餅の廉賣に身を入れたのである。即ち一升五合の餅に景品なき添へて、半額の五十錢で賣つたのであるから、到る處に歡迎せられたのは申す迄もない。即ち左の如し。

青山二、〇二〇。上野一、一六〇。月島三〇〇。千駄谷六〇〇。小石川三一〇。新宿御苑三〇〇。芝公園一、三五〇。芝離宮一、三三〇。日比谷一、一〇〇。九段七〇〇。淺草一、〇〇〇。本所一、〇〇〇。下谷一、〇〇〇。神田五〇〇。麻布二〇〇。盲人一七〇。深川一、五五〇。其他

つまり鬩斗餅を賣つた戸數一萬五千、餅代金一萬五千圓にて、廉賣又は寄贈によれる欠損金八千圓であつた。

大正十三年末に於ける同じ運動は、下谷、淺草、深川、本所、小石川、麻布、四谷、三河島、吾嬬、平塚、和田堀等の各方面に行はれ、六千枚の鬩斗餅、實價金六千圓なるを、半價の金參千圓にて廉賣したのである。もつとも此等は東京での話であるが、他の各地に於ける同じ種類の運動の事は、之を略するのである。

#### (五) 臨時の救護運動

其他臨時の救護運動としては

(イ) 大正十三年三月、雜司ヶ谷にて六百餘戸を燒失したるに對し、食料品、家具等、目方にして

六百貫ほどのものを配給して、之を慰問した。

(ロ) 同十月、芝離宮バラック焼失の際は、救世軍の保育所のみ不思議に免れたので、そこを中心として罹災者の收容やら、救助やらに盡力した。

(ハ) 同十一月、下谷の大火に際しては支那蕎麥、牛乳等を焼出されたばかりの人々に配給し、又日用品を配つて之を救護した。

(ニ) 同十四年一月、淺草田中町にて二百九十戸が焼けた際には、寒風の吹きすさぶ際ではあり、盛んに汁粉をふるまうて罹災者を慰問した。

(ホ) 又寒天に失業者の多く出て居るのを見、深川東町ミ、淺草田中町ミの二ヶ所に天幕を張り、兩所共毎日百五十人迄、仕事がなく、随つて空腹に悩む人々を養うた。中には此の天幕で食事をした後、貰うたトラクトから志を立て、職が見付らないから納豆屋ミなり、今では無料宿泊所から有料に轉じ、自活自營に至つたに就いては、進んで信仰の生活を營む決心であるこゝを、話に来て、禮をいふたやうな人もある。此の二つの天幕にて食事を給した数は計六千人である。

(ヘ) 又本所の社會植民部を中心として、寒中窮乏に悩む人々を家々に訪問し、白米だの、炭團などを配給した。

(ト) 三月十八日、日暮里にて千七百戸を焼失したるに對し、應急の處置ミしてビスケット、牛乳甘酒などを罹災者に供し、後からネル、晒木綿、石鹼、齒磨等の日用品に「平民之福音」なき添へて避難先の家族に贈つたのである。

(チ) 五月二十三日、熊谷町の大火にて七百戸を焼失したるに對し、直ちに社會書記官を派して、罹災者を慰問し、物資の配給なきした。

(リ) 山陰道の豊岡町、城の崎町等の震災に對しても、直ぐに京阪地方から士官及び兵士を派して之が慰問救護に盡力せしめた。

(ヌ) 又小樽の爆發慘事に對し、率先して遭難者の慰問救護に盡力したやうなこゝもあれど、今一々之を盡すこゝが出来ない。

## 救靈戰の勝利

言ふ迄もなく救世軍の本領は、其の靈魂を救ふ爲に戰ふ所に存する。それは社會事業の方面に於てさへ然うであるから、まして其の所謂小隊、聯隊の運動に於ては尙更のこゝである。大震災の爲に會館を失うた後に、早速それぞれの建物を新築せられたるは、神田、麻布、京橋、芝、深川、下谷、淺草、吾嬭、横濱、横須賀等にて、其の大部分は前よりも遙に便利も宜く、規模も大なる會館を得たわけである。震災地以外では滿洲の大連に素破らしい立派な煉瓦造、三階建の會館が出来た。桐生にも其の地方の親切な軍友の贊助によりて一會館を新設せられた。沼津、濱松ミには篤志なる軍人が會館向の建物を造つて小隊に貸さる、こゝこゝ、なつたのである。出雲の横田に、岡崎曹長が山陰道第一の會館を建て、無料にて其の地救世軍の用に供せらる、こゝこゝ、なつたのは、地震より少し前のこゝであつた。

全國にある百餘箇の小隊分隊では、引續き盛んに主の御軍を戦ふて居る。近年著しいのは、こゝに行つて見ても、これ迄に曾てなきほど、救世軍の軍服を着け、徽章を帶び、其の立場を明かにして、御救の爲に奉仕する軍人の數を増しつゝあるこゝこゝである。

## 拾つた金時計を一年振に警視廳へ

警視廳の田村遺失物係長が近頃無く感激して「ブーム」と腕を結んだ事件がある。それは十三日の朝「罪深い一労働者より」と署名した粗末な封書が遺失物係へ届いた、中から轉げ出したのは立派な女持の金時計。同封の手紙には、鉛筆で次の如くつゞられてゐる。

「此腕時計は昨年の五月頃中央線下り夜行列車内の洗面所で拾ひました。今度私は救世軍でイエス様に救はれましたから神様に悔改めてお返し申します。今まで少しも使ひませんが、持つてゐたことは大變な罪人でありませぬ。今は神様が赦して下さる事を信じます、私は今落し主のわかる事を祈つてゐますアーメン。

(附記)止める紐は親類の者にやつてしまひましたから、かばりの物をつけました」

鉛筆で薄くこくたなどしく書かれてゐるが一生懸命の心は文面に溢れてゐる。ところで警視廳の統計では遺失物届と發見された遺失物の数とを比較してその三十パーセントは横領されてゐると見なされてゐる道徳衰微の今日、こんな人間性の美しさを發揮した事件は、大いに珍重すべきであると云ふので、「この悔改めた労働者の良心の平和のためにも一日も早く遺し主が判明して欲しい」と田村係長はもう一べん腕を結び直した。(東京朝日)

## 酒屋を廢業して昆布巻屋となる

大正十三年の紀元節の夜滿洲大連の救世軍にて諸名士を聘して禁酒大講演會を催した處が、そこへ奥城某といふ年若い酒屋の主人が入り來り、一心に代る代るの演説を聴聞して居つたが、深く心に感ずる所ありたるものと見え、會の終に前に進み出て、「私は酒屋の主人であります、今後自分でも酒を飲まない、又明日から酒を賣らないと決心しました」と告白し、翌日は早速民政署へ行つて酒屋を廢業の手續をしてしまつた。そ

んな事とは知らず近所の人々が徳利をさげて酒を買ひに出かけると、硝子戸の上に大きな廣告をして、「禁酒會員になりましたから、酒屋を廢業致しました、皆様にも禁酒をお勧め申します」と書出してあるから、皆吃驚した。「君はよくそんなに思ひ切つて廢業が出来た。どうしてそんなに、美事にやりぬいたのか」と問ふと。奥城君の答に「それは一つは演説に感心したからですけれど、一つは豫てから思ひ當る所があつたのです。私は父を喪ふて母と一緒に、二人の弟の世話をして居りますが、お客さんのない時は二人の弟に向ひ、酒を飲むな堅氣に働いて立派な人になつてくれと、いふて居る所へお客さんが來られると、ハイ之は上等のお酒であります。澤山召上つて下さいといふ。つまり二人の弟には酒をのまないで立派な人になれと言ひ、近所の方々には澤山のんで、どうでもなりなさいといふ様なわけに當り、甚だ相濟まざることに考へて居つた所へ。指で眼球を突つてやうに、急所を突いた御演説に感じ入り、乃ち早速廢業の決心をするに至りました、といふのであつた。それでは今後の生計はどうするかといふ一段になり、大連には四萬の日本人が居り、大概の商賣は何でもあるが唯こぶ巻を賣る家丈一軒もなかつた。然るに奥城君は救世軍の人で教習はこぶ巻の名所であるから、お母さん、こぶ巻をこしらへて見ませうか。それは至極好からう」といふやうなことで、乃ちこぶ巻屋を始めると、あの酒屋を廢業した感心な男がこぶ巻を造り出したとか、買つてやれ」といふ親切な人々も多く現れ、見る見るうちに幾ら造つても足りない程商賣が繁昌するに至り、今度は何とも良心に疾しい所のない家業であるから、自分でも仕事に油が乗つて、これ迄よりも更に一層愉快に、幸福に、家業を勉強して居るのである。同君は爾來救世軍大連小隊の忠實な兵士として、熱心に信仰の道をも勵んで居るのである。

## 五年間に四千圓の借金を拂ふ

神田小隊の岡村曹長は大正九年に悔改めて基督を信仰し、救世軍兵士となつたのであるが、其の當時は借金

三千六百圓あつた。それをどんなにしても皆済したいと決心し、神に祈りつゝ努力した甲斐あり、商賣は萬年筆を携へ、一聯隊、三聯隊等殊に軍隊などに持つて歩いて賣るのであるが、其の餘り大きくない營業の中からそれでも毎月七十圓五十錢宛を拂ひ続け、利子を合せて金四千圓餘の借金を去五年間に全く辨償し、去五月十四日の夜は、其の屬する小隊の戦友に寄つてもらうて、借金皆済の感謝會を營んだ。

### 銀婚式に表彰せられた篤行者

兩陛下銀婚の祝典に當り、篤行者として、宮内省から表彰された幾人かの人々の中に、節婦朝枝すみ子の名を見出すであらう。彼女は救世軍門司小隊に屬する女兵士にして、良人は元海軍々人であつたが不幸にして十數年來、病床の人となりたるに、すみ子夫人は之に事へて貞節を盡し、只管其の看護に當り、妻として最善の奉仕を爲すは言ふまでもなく、女の手一つで八人ある子女を立派に養育し、眞に婦人の龜鑑である。今迄も縣より表彰されしことありしと聞きしが、此の度、前述の如き名譽を擔はれたのである。

此うした軍人の各地に追々増加はりつゝあるは、全く神の御力によるものにして、其の御名を讚美し奉るべきことである。

唯多年救世軍中に、或は下士官とし、或は兵士として善戦を續けて居る多數の戰士達のこゝ等、餘白がない爲に、之を語り得ないのを憾とする。工學博士佐藤定吉氏が去數年間、一救世軍兵士としての不斷の健闘は、中外の共に感嘆に堪へざる所であつた。

### 最も有力なる軍友

救世軍の最も舊く、且最も眞實なる友人にて、最近世を去られた者の中、島田三郎、安藤太郎、植

村正久、小河滋次郎、矢島楯子の五氏の如きは、いつ迄も忘るゝことの出来ない方々である。左は本文の記者が、島田三郎氏の葬儀の席にて説教したる一節であつた。

序に彼と救世軍との關係に就いて一言することを許されたい。彼は日本の救世軍に取りて最も舊く、且最も

眞實なる友人、知己、又恩人であつた。日本の社會が未だ一向救世軍を理解してくられず、嘲弄、罵詈、反對、迫害が私共を取巻いて居る時、獨り椽大の筆を揮ふて、「ゴアース大將と救世軍」を論じ、好意を以て之を世に紹介した者は彼であつた。始めて娼妓救済の運動を起した時の如き、世間は唯私共を以て、故らに平地に波を起す者、又は何か爲にする所ある者の如く嫉視した。しかし乍ら斯る場合に彼は自ら筆を執りて「一點の詭謀なく、一毫の表裏なく、唯憐れむべき女奴を救済するの目的を以て、險を履み難を冒して盡力止まざるは、救世軍娼妓救助の運動なり」といふ一文を草し、江原、安藤、根本の三氏と、名を列れて之を毎日新聞紙上に掲げ、私共の爲に義捐金を求めらるゝに至つたのである。

今の所謂社會鍋の起原は、或年の甚貧民に雜煮餅を食べさする分別をしたと思ひ、彼に其の事を相談するのと「それでは毎日新聞の紙面を其の爲に貸しませう」と言はれ、乃ち隔日に何か書いて寄稿し、かくして得た數百圓を用ゐて、雜煮餅を配附したのが始にて、後毎日新聞が彼の手を離れ他に何等かの方法を講ずる必要を生じ、米國の救世軍がクリスマス前後に、湯沸を三本足に釣して街頭に立てるのを日本流に適用し、今の三脚鍋を出すやうなこととなつたのである。

明治四十年救世軍の創立者、大將ウイリアム、アース來朝の節は之と相見て、頗る意氣相投する所あるものゝ如く見受けられた。其の以來私共が貧民病院を起し、結核療養所を設け、又は本營の建物を建つる時など、いつも彼の援助を煩はざるはなく、救世軍後援會の趣意書をさへ彼に依頼して起草してもらつた程であつた。數年前貧弱なる私共の社會事業の事が長くも天聽に達し、年々一定の御下賜金を拜受するに至りたる如き、一つには彼の推舉が與つて力ありしやに承知して居る。折々彼を訪ふて事業上の進歩を語れば、我が事のやう

に喜ばれ、其の困難を語れば、自分の事のやうに心配せられた。辭して歸らうとすれば、いつでも起つて玄關まで見送り、其の都度「どうかあなたの健康をお大事に」といはれた。他人の健康のことをそんなに心配せられた彼が、今や世に亡いのである。亦哀しいことではないか。

植村氏は基督教界の長老にて、救世軍の日本に開戦當時、其の「軍中の約束」の翻譯を助けられた。以來の軍友である。安藤氏は其の夫人文子夫人と共に、救世軍に厚い同情を有つた人にて「凡そ禁酒會員たらんものは、亦必ず救世軍の克己週間感謝祭を助けらる、やうお勧めする」ことは、安藤氏が禁酒雜誌「國の光」に掲げられた文章の一節であつた。私共は又矢島楯子女史と、小河博士との多年の同情と援助とを感謝に堪へぬものである。

## 救世軍の陣容

救世軍の本營は東京市神田區一ツ橋通町にあり。其の司令官はイーデー中將である。彼は英國、カナダ、米國、南アフリカ等諸國にて、司令官、書記長官等、大切な役目を勤め來りたる百戰の老將軍である。去十八年間書記長官を勤めた山室大佐は、約一ヶ年渡英して見學、協議等を遂げて歸朝すべき筈にて、其のあこはバグマヤ中佐が其の椅子を占むることとなつた。戰場書記官はウイルソン中佐にて、矢吹中佐は心靈特務、瀬川少佐は社會書記官、指田中佐は士官學校の教頭、植村少佐は士官學校々長の講習會に出席の爲に渡英中。ビツグウツド參軍は士官學校々長代理、クリムソン參軍は參謀書記官、ロルフ參軍は財務書記官、大野參軍は財産書記官、堀參軍は青年部長、スマイス參軍は後援部長。全國を十箇の聯隊、大隊に分つ。東東京聯隊長高城少佐、西東京聯隊長張田中

校、關西聯隊長石島參軍、關東聯隊長山中々校、東北聯隊長太田參軍、北海道聯隊長岡中校、東海道聯隊長中島中校、中國聯隊長森川中校、九州聯隊長小沼中校、南滿大隊長細井少校等は、其の指導者である。

松田院長（醫學士）と、岩佐中校（女醫）とが救世軍の療養事業に盡された功績顯著なるものありとして、萬國本營から、「創立者章」を贈られたのは、祝著の至である。ウイルソン中佐、太田參軍、高野監軍夫人、曾谷戰場少佐等は何れも士官として勤続二十五年以上に達したるを以て、其の「精勤章」を授けられた。目下倫敦に留學中の秋元、添田兩大尉は日ならず歸朝すべく、それと入代に坂田、坂本、森の三大尉と長井中尉（以上男子）大友、近藤の兩大尉（以上婦人）の六人は新に萬國士官學校に入學の爲に渡英することとなつた。

## 聖恩無量

皇室の我が救世軍に對する優渥なる思召は、唯々恐懼感激に堪へざる所である。其の最近に恩命に接した所を略記すれば次の如し。

大正十二年九月、震災直後に、我が社會事業に對し金二千圓の御助成を戴きたる事

同十三年一月二十六日、御成婚式の當日、山室軍平が「多年社會事業に盡力し功績顯著なる趣被聞食、以思召御紋附銀盃壹箇及金貳百圓下賜」相成りたる事

同日、右同様の御下賜を、大連育兒及婦人ホーム附、特務曹長早川クマ女に下し置かれたる事

同年二月十一日、豫て年々金一千圓を拜受し居れる以外に、更に一般社會事業の爲に金一千圓、又釋放者保護事業の爲に金八百圓を御下賜あらせられたる事

同日、別に金五百圓を大連の育兒及婦人ホームに御下賜に相成たる事

同日、山室軍平を勳六等に叙し、瑞寶章を授けられたる事

同十四年二月十一日、豫て毎年金一千圓を御下賜あらせらるゝ以外に、金一千圓を一般の社會事業に、金二百圓を勞作館に、金二百圓を東京婦人ホームに、金二百圓を希望館に、金二百圓を女子希望館に、金五百圓を大連育兒及婦人ホームに御下賜あらせられたる事

尙附加へて、同年四月、御慶事記念慶福會より、金五千圓を救世軍療養所御助成の爲に交附せられたる事

同五月二十五日、東伏見宮妃殿下が、山室大佐を召され、其の事業の概況を御聴取遊ばされたる事

其の他、何彼に就けて私共は 皇室の御仁慈に感奮する所のみ多いのである。神が我が 皇室の上に絶えず豊なる御祝福を垂れさせ給はんことを、切に祈り奉るのである。

## 當局の理解ある助成

震災直後の救護運動に於ては、當局の理解ある取扱によりて、され程便宜を得たことが知れない。此の意味に於て私共は、内務省、東京府、市、警視廳、又神奈川縣、横濱市等の當局者に對して、心からの謝意を表すべき理由がある。

震災救護事務局にては、大阪府から寄贈せられた組立六十坪の建物材料九棟を救世軍に交附せられたので、私共はそれを用ゐて日比谷、九段、上野、青山の各バラックに保育所、及び隣保館を建て、又、本營、病院、月島淺草の勞働寄宿舎、又社會植民部等の假普請をなし、取敢ず其の事業を開始するところを得たのである。

大正十三年二月十一日、内務省より金八百圓、東京府より金四百圓を、我が社會事業部に下賜せられた。十四年二月十一日には内務省より金千圓、東京府より金四百圓、横濱市より我が民衆館に對して金千圓の助成を與へられた。

十三年五月三十日、内務省より救世軍の社會事業復舊、又發展の爲に、金九萬圓救世軍病院の爲、金二萬圓救世軍療養所の爲、金二萬圓淺草勞働寄宿舎の爲、金千圓東京婦人ホームの爲に下賜せらるゝこと、なつた。

司法省よりは勞作館に對し、大正十二、三年の兩度金三百圓宛、希望館に對し、同二百圓宛、東京婦人ホームに對して金二百圓宛、を助成せられた。

内務省は又救世軍療養所維持費の内へ、大正十二年度に於て金千四百七十五圓、十三年度に於て千四百七十五圓を補助せられたのである。

東京市よりは大正十二年度に於て金千八百圓、三年度に於て亦金千八百圓を下附せられたのである

東京府よりは又月島勞働寄宿舎(改名、自助館)に對し金二萬六千六百五十圓の建築費と、金三千九百九十八圓の初度調辨費と、木材六百十五石(換算額金四千五百圓)とを交附して委任經費事業とせられた。又本所の社會植民部に對し、金二千八百圓の建築費と、金九百圓の初度調辨費と、金二千九百圓の經常費補助と、木材百二十石(換算額金六百圓)との補助を與へられた、又芝離宮と日比谷との我が保育所に對し、設備改善費二千四百圓、經常費五千八百圓を補助せられたのである。

神奈川縣よりは横濱の救世軍民衆館の爲に、建築費金二萬六千六百五十圓、初度調辨費金三千五百五十八圓八十錢、借地料金五百四十圓、木材六百十五石(換算額金四千三百〇五圓)を交附し、委託經營として、其の事業を行はしめらるゝこと、なつたのである。

大連の育兒及び婦人ホームに對して、南滿洲鐵道會社は引續き毎年金二千四百圓、又大連市役所よりは毎年



金千二百圓宛の補助を興へて居られる。又大連に新築したる會館に對し、南滿洲鐵道會社より金一萬二千圓の補助を得たのは、眞に忝いことであつた。別に關東廳より金千圓社會事業部に下附せられた。輔成會からは震災直後、我が東京婦人ホームの修繕の爲に金三百圓を交附せられた。

### 天下の同情

震災に對し、倫敦の萬國本營から援助せられた高は金二十五萬五千三百三十九圓十三錢にて此の中には大平洋沿岸の我が同胞から寄附せられた金、又支那、蘭領東印度、朝鮮、カナダ、新西蘭、米國其他各地よりの義捐金を含むのである。

三井、岩崎兩家よりは去大正十一年以來年々金三千圓宛を寄附せられた。安田保善社よりは大正十三年以來金二千圓宛、大倉喜七郎氏よりは金千五百圓、原邦造氏よりは金千圓を寄附せられて居る。大原孫三郎氏より年々金千圓、田村新吉氏より金三百圓宛を援助せられて居るのは、既に五六年来のことである。

「主婦の友」の石川武美氏よりは震災後の兒童保育事業の爲に金五千三百圓を贈られ、後其の讀者よりの寄附金千四百二十四圓七十七錢を纏めて寄附せられたのである。陸奥伯は大正十一年より三年間毎年金二千八百圓宛を其の主宰せらるゝ兩潤會から寄附して、救世軍療養所に第二兩潤寮を建てしめられた。森村男は金千圓を一般事業の爲に寄附せられた他に、金五百圓山室大佐敍勳祝の爲へ之は本營に納入し金三百圓冬季無料食物供給の爲、金五百圓日暮里大火の爲に寄附せられたのである。

其他震災後重なる御寄附は金二百圓野崎末夫氏、金百五十圓近藤サト氏、金百五十圓寺井四郎兵衛氏、金百五十圓宇野富夫氏、金百五十圓平賀敏氏、金二百圓末廣良成氏、金百圓江藤溝佐夫氏、金三百八十五圓高島直一郎氏、金五百圓エリス氏、金百六十三圓七十三錢アリチツシ、リীগ、金五百圓田中氏、金二百圓伊藤

孝三氏、金千圓山本徳尙氏、金百圓長澤勇次郎氏、金百圓山中清兵衛氏、金二百圓無名氏、金百圓西原修三氏、金五百圓日本傳道隊、金百圓小林富次郎氏、金百二十七圓六十七錢櫻友會、金三百圓外島氏、此等は特に社會事業の爲の御寄附である。

金二百圓大倉和親氏、金二百圓宇佐早出彦氏、金百圓島田孝一氏、金四百五十圓川喜田鐵之助氏、金百圓平岡貞氏、金百圓赤池濃氏、金百圓岡本俊一氏、金千圓古河男、金五百圓米山梅吉氏、金千圓廣岡惠三氏、金五百圓藤山雷太氏、金三百圓小池國三氏、金千圓澁澤子、金百圓山口廣一氏、金百五十圓中村克己氏、金百圓住友氏、金五百圓上野不二雄氏、金百八十二圓中央社會事業協會、金百圓芝本秀三郎氏、金百圓ストラター氏、金百圓フランチャイ氏、金百圓カフマン氏、金百圓カークパトリック氏、金百圓サムエル、サムエル氏、金百圓フラー商會、金二百五十圓ヒーリング商會、金百圓サムマー商會、金百圓マセソン氏、金二百五十圓スタンダード石油商會、金二百圓ライシング、サン、ペトレアム商會、金百圓ジョナス氏、金二百圓アメリカン商會、金百圓ハンター商會、金二百五十圓アランナー・モンド商會、金百圓ケルビー・クロー氏、金百圓ジョナス商會、金百圓ジェームス氏、金百圓ケルベルグ氏、金百圓アウル氏、金百圓ラドルフ氏、金百圓ヘグナル氏、金百圓テル、オロ商會、金百圓センマ、ウオルクス、金百圓ナアホルズ商會、金百圓エイワード商會、此等は皆一般資金への御寄附である。

別に大阪女子希望館敷地購入の爲に萬國本營より金三千三百七十圓の補助を得たる外に、金千圓三木常太郎氏、金千五百圓橋本喜作氏、金二百圓今井安太郎氏、金二百圓船橋福松氏、金百圓江指卯之助氏等の御寄附を得た。又女子希望館經常費の内へ金百圓本山彦一氏、金百五十圓小山健男氏、の御寄附があつた。滿洲大連の會館建立に對しては、萬國本營より金九千九百〇八圓三十九錢の補助を受けたる外に、金一萬二千圓南滿洲鐵道會社、金二千圓大連水曜會（銀行團）金三千圓救世軍人一同、金一千一百圓廣瀬庸三氏、金四百五十圓小澤太兵衛氏、金三百圓相生由太郎氏、金三百圓高岡又一郎氏、金百圓小島鉦太郎氏、金百圓勝

侯喜十郎氏、金百圓原田光次郎氏、金百圓原田猪太郎氏、金百圓飯田耕一郎氏、金百圓中村松之助氏、金百圓三谷嘉吉氏、金百圓大連華商公議所、金百圓周文貴氏、金百圓朱春山氏、金百圓奉天金曜會（銀行團）金百圓向井忠晴氏、金百圓石田榮造氏、金百圓平高寅太郎氏、金百圓川村竹治氏、金百圓山下永幸氏、金百圓横井教郎氏、金百圓三圓滿鐵沙河工場有志等、多數の方々の援助を得たのである。

桐生會館に對しては金千圓青木專治氏、金二百五十圓堀福平氏、金二百圓齊藤武助氏、金百圓前原準一郎氏、金百圓松本武雄氏、金百圓森香一郎氏、金百圓東海銀行支店、金百圓青木英作氏、金百圓書上文左衛門氏、其の他多くの同情ある方々のお助を得た。

大阪の希望館を直接贊助せられた中に金百圓老原芳太郎氏、金二百圓大阪毎日新聞社慈善團、金百五十圓小山健男氏、金百圓大阪府廳社會課等あり、大連育兒及婦人ホームの維持の爲に金二百五十圓兒玉關東長官、金百圓福田稔氏、金百圓也入江正太郎氏、金百圓勝侯喜十郎氏、金百五十圓渡邊榮一郎氏、金百五十圓是松登進氏、金三百圓川村竹治氏、金二百圓水野柳治氏、金百圓神田勝亥氏、金百二十圓米岡昌策氏等の御援助あり。其の他各地の同情者、軍友が何彼の折に種々の方面から我軍を助けられつゝある厚意は、到底言語に盡せない。

尙大正十二年秋の感謝祭には金二萬七千二百四十七圓五十四錢、同十三年春の克己週間には五萬五千四百圓秋の感謝祭には金五萬二千七百〇八圓六十六錢、同十四年春の克己週間には金六萬二千五百圓の收入があつた。これらは皆數へ切れぬ程多數の各方面に於ける軍友方の同情の結晶として、私共が心から感佩に堪へざる所である。

## 救世軍と山室君（附錄）

### 山室君の英國行を送る演說筆記

（六月廿四日の夜、青山會館に於て）

（一）

蘇峰生

滿堂の各位、本夕山室大佐の英國行送別會に列し、蕪辭を陳するを許されたのは良きに欣幸の次第であります。私は去る五月二十九日附にて、救世軍本營なる山室大佐よりして、左の一書を受取りました。

小生が救世軍に投じてより滿三十年（當年秋にて）又二人乗の人力車に同乗して、新富座の裏の教會堂に御案内申上げ、青年會の演說をして戴いてより三十六年……小生としては、此際先生より、假令僅でも御高話を拜聽するを得候へば、身に餘る幸福に有らざる云々。

如何にも感激に滿ちたるお言葉で、斯くて私も欣然罷り出でた次第であります。

私と山室大佐とは三十六年以來の知己であります。私の恵まれたる友人の中、基督教主義の社會事業に、献身せられたる方々の中にて、最も敬服したるは故石井十次君、留岡幸助君、山室軍平君であります。石井君は既に昇天せられ、留岡君は漸く還曆を過ぎて、意氣尚ほ豪、山室大佐に至りて

は我等に比して、春秋に富み、今が最も人生の油の乗つた時節に存じます。

山室大佐の此行は、尋常一様の海外旅行ではありません。今回は約一個年間英國に在りて、凡有る見學をなし、歸來日本の救世軍を双肩に荷ふて、愈よ御奉公を勤め勵む譯であること、承りました。されば私共が大佐の此行を壯にするは、洵に所以ある次第であります。恐らくは大佐の歸朝と同時に、日本に於ける救世軍は、總ての點に於て、自治が出来るであらうと信じます。此れは救世軍の立場から見ても、日本の立場から見ても、將た山室大佐の立場から見ても、何れも慶賀に禁へない事でありませう。

私は未だ大佐からして、救世軍に投ぜられたる由縁を承りませぬ。併し日本に於ける救世軍が、始めに山室大佐を得たるは、實に第一の勝利でありました、而して大佐が救世軍に投ぜられたのも、大佐に取りて、人生の行路の第一成功であつたと思ひます。云は、日本の救世軍は、大佐によりて其の本領を發揮し山室大佐は、亦救世軍によりて其の本領を發揮しました。此れを神の御心でないこと、誰か申しませうぞ。

## (二)

私は宗教に於ては、先づ無籍者であります。救世軍に就ても、深く知る所はありません。惟ふに英國監督教會からジョン・ウエスレー出で來りて、メソヂスト教會を創めて以來、百八十五年、そのメソヂスト教會よりウイリアム・ブリスが救世軍を創めて以來六十年、斯る時代に、斯る宗教的制度の出で來つたのは、歴史的瞳孔からすれば、良きに已むを得ない次第であつたと思ひます。私は深くブリス大將夫妻の胸の奥迄、立入りて吟味したのではありませぬ。されど彼等が神學より

も純信に、空想よりも實行に、獨善よりも救済に、臆病退嬰よりも、破魔の利劍を振り翳して、惡魔の巢窟に飛び入りたるは、必らず彼等が、已むに已まれぬ動機に導かれたものと思ひます。或はモーゼが雲の柱や、火の柱を見て、アラビヤの荒野を辿り行きたる如く、彼等夫婦も、暗黒の眞中に、天光を見て、慕進したものと思ひます。

私は此の六十年間の救世軍の歴史を眺めて、眞に奇蹟は、此事であらうと存じます。ウイリアム・ブリス云ひ、其妻カザリン・ブリス云ひ、彼等は信仰以外に、何物をも持つて居ませなんだ。學問も、財力も、門地も、後援も、殆んど持たざるものは、何も持ち合はして居ませなんだ。彼等は神を信ずるのみ、己を信ずるのみの外には、無一物でありました。而して彼等は迫害を被りました、それも其筈であります。彼等の態度は、世の諸惡に對して、挑戰的であつたからです。佛教でも諸惡莫作、衆善奉行と申しますが、彼等は諸惡退治、衆善勵行であります。彼等は惡魔は、當初から喧嘩腰です。決して妥協的ではありませんでした。

然るに此の眇たる二人の男女は、遂に世界を征伏して、救世軍の世界的大帝國を作りました。固より征伏し了つたは申しませぬ。されど今日救世軍は、世界の凡有る方面に行き渡つて居ります。國から申せば、八十一國であります。其教を傳ふる言葉は、五十三種の言語があります。此の廣き版圖は、古への羅馬帝國も及びませぬ。又た成吉思汗の帝國も及びませぬ、今日其の領土に太陽の没するなしと云はる、ジョージ五世の帝國も及びませぬ。而して斯る大帝國を造り上げて、一人の寡婦や、孤兒を作り出したでもなく、一個の黒點を、歴史に印したるでなく、所謂破邪顯正の凱歌を奏して、此に至つたのであります。之を奇蹟と申さずして、何と申しませうぞ。

## (三)

私は救世軍の勃興を以て、對症投藥に申したのであります。政治上社會上には佛國革命以降、經濟上、生活上には産業革命以降、物的の不權衡は、又た隨處に靈的の不健全を來たしました。されば此際に、各種各様の社會改造の意見や、計案も出で來りました。其中にて、救世軍は最も簡單明瞭であります、救世軍は最も八方無礙であります、而して救世軍は最も其の實行性を、多量に持つるものであります。

第一に救世軍は、陽氣である、毫も陰氣でない、暗くない、明くある。時としては貴族趣味の人に於ては、餘りに陽氣であり過ぎはせぬか、氣遣はる、程である。所謂の幸ひなる宗教の表現でありませぬ。凡有る罪惡は、暗處より生じます。然も救世軍は世界の隅々をして、光明あらしめん心掛けを以ててゐます。

第二に救世軍は、思案、投首的でなく、即時實行的であります。餘計な知恵、分別を廻らして、評定に其日を送りつゝある間に、救世軍はさし／＼其の著手し得可き點から、着手して行きます。世上の志士仁人の言ひ行ひは、概して非常の距離があります。されど救世軍は、行ひ得可らざる言ひを言はぬ代りに、言ふことは概して行ひ、且つ行ひ得んを助めてゐます。

第三に救世軍は、學說に偏せず、哲學に囚はれず、教理に縛られず、唯だ心靈の救を絶叫する。現ブラス大將夫人が、救世軍の目的を語りて、

第一は、男子、婦人、及び子供を罪から救ふ事

第二は、彼等に他人を救ふの手法を教習せしむる事

と申されたのは、如何にも要領を得てゐるものと存じます。

第四は全人類である。救世軍の眼中には、白人も黄人もない、又た英國も日本もない、固より資

本家も、勞働者もなく、有産階級も、無産階級もない。其の敵は、只だ惡である。苟も善に與みする者は、救世軍の友であり、惡に與する者は、救世軍の敵である。敵味方の差別は、只だ此の一點であります。されば救世軍の味方には、上は帝王より、下は乞食に至る迄あります。即ち凡有る境遇の人類を包括してゐます。救世軍の袋は、社會主義者杯の袋よりも、其口は廣く、其底は深くある様であります。

#### (四)

更らに私の最も共鳴するのは、救世軍の戰闘的態度であります。彼等は決して惡を畏れませぬ。世の中に惡の増長するのは、善人が惡を畏る、からです。然も救世軍は、惡を退治するを、其の職分と考へて居る様です。何やら社會の大掃除を、一手販賣にしてゐる様です。賣淫問題、飲酒問題、貧乏問題、其他社會の掃溜の處分は、何れも救世軍の繩張りの中であります。

救世軍は決して靈を救ふのみでは満足しませぬ。所謂靈肉一如の救濟であります。此れは故大將ブラスの『最暗國の英國及其出路』の刊行が、詳かに之を語りて居ります。(一八九〇年十一月、明治二十三年)日本に於ける救世軍も此の意味に於て、成功して居ります。救世軍は溺れたる人に向つて、汝は何故に溺れたる乎と、岸上から叱りつけませぬ、自から手を伸ばして、時には足を投じて之を引上げるのが、其の本旨か存じます。一昨年の大震災に於ける、救世軍の活動振りは、實に我等の讃稱に値するものと思ひます。

兎角心靈に重きを置く者は、高踏派となり易いものです。云は、精神的貴族主義に偏する様の、傾向があります。デモクラシーの世の中には、此れでは普遍的に、宗教の恩澤を及ぼすことが出來ま

せぬ。然るに救世軍には、劉玄徳が、其子を戒めたる言葉の如く、惡の小なるを以て爲す勿れ、善の小なるを以て爲さざる勿れと申す通り、細大こなく諸々の害惡は、悉く退治の條目に入れてあります。而して其善行は、又た細大こなく、顯揚の條目に入れてあります。世の中に思想善導なごと申す者がありますが、少くも救世軍が盛んなれば、思想は善導せられます。救世軍は現代の社會を、其儘に受け取りて、其の弊害を矯正するものでありまして、決して社會其物を根柢から覆へさんごするものではありません。さればブリス第一世も、ブリス第二世も、世界の無産階級の親友である如く、又た凡有る帝王、大統領、又は爲政者の友でありましたし、又た有ります。彼等兩人は、屢々是等の方々に謁見し、又た其の深厚なる同情に浴して居りましたし、又た浴して居ります。

## (五)

日本に於ける、救世軍の今日あるは、半ば以上山室大佐の努力奮闘に由るに申すは、必らずしも友人たる私の最良目でありませぬ。然も山室大佐をして、其の手腕を揮はしめたる、亦たブリス第一世、第二世、最高幹部其他の力に申さねばなりませぬ。救世軍は日本に入りて三十年になります。今では士官三百人、下士官九百人、兵士一萬人。其の傳道所は全國に百餘あり、其の社會的事業として、結核療養所あり、貧民病院あり、勞働寄宿、及び職業紹介あり、婦人救濟事業あり、釋放者保護あり、育兒ホーム、其他幾許の社會事業があります。

此の三十年間の成績に就て、記憶すべきは、ブリス大將が、八十歳に垂んごする老軀を提げて、明治四十年五月に、我が大日本帝國を見舞はれたことでもあります。而して我が明治天皇が、救世軍制服の儘にて、謁見を賜はつたことでもあります。此れは日本に於ける救世軍の歴史に、特筆大書すべき事柄と存じます。而して我が明治天皇陛下に於せられても、破格の御待遇と恐察し奉ります。我が明治天皇は、歐洲列國の帝王の或る方々の如く、社交的と申すことは、餘りに御好みであつたことは承りませぬ。されば斯る謁見も、日本の天皇たる天職を御賜し遊ばさるご思召ての故で、決して御慰みごか御樂みごか申す意味ではなかつたこと、恐察致します。ブリス大將が、天皇の巍巍蕩々たる神嚴の御氣に打たれたるは、申す迄もありません。天皇に於せられても、長き年月に互りて、多くの外人に謁見を賜ひたる中にて、最も御印象の鮮で、深かつたのは、米國前大統領グラント將軍と、此のブリス大將とで在つたてはありますまいか、私は恐察し奉るのであります。ブリス大將が、如何なる程度迄、日本及び日本國民を諒解しました乎。そは私の知る處ではありませぬが、少くも日本に來りて、其の大體だけは、看取したご、存じます。何れにしても救世軍の日本に於ける成功は、日本を諒解し、日本人と協贊した爲めであります。而して其の成功を完全ならしめんには、其の事業を、日本人の手に一任するを先務と存じます。

## (六)

日本に最初に基督教を傳へたのは、聖徒ザヒエーであります。彼は如何にも聖徒でありまして、今尚ほ愛慕に勝へませぬ。彼は能く日本人を諒解しました。彼等は驚く可く矜重である。彼等は何物よりも體面を重んず。此れは破的の眼識であります。日本人は古も今も、全く其の通りであります。然るにザヒエーに次いで、續々日本に來りたる諸宣教師

師は、寧ろ日本人を恐れ、且つ憚りて、彼等の差別待遇いたしました。詳に言へば、彼等に翻譯せしめ、通譯せしめ、或は事務を取らしめ、傳道せしめ、説教せしめましたが、其の幹部には加へなかつた。即ち彼等を使用人として使用して、仲間として協議しなかつた。此れが天文より慶長元和に至る間、日本の耶穌教傳道が、其の理想的の進歩を見る能はなかつた理由の、總てでないとするも重なる一であつたに存じます。

此の傾向は、恐らくは明治の初期から中期迄も、我諸外國宣教師間にも、行はれたらしく思はれます。然も今や何れの基督教派も、絶對的のままで行きませんとして、概ねこの差別的待遇が、撤廢せられた様であります。此れは經驗の教訓を受用したるものとして、至極尤のことであります。

救世軍は一方には、嚴格なる軍制を應用してゐますが、他方には、四海兄弟の旨義を、實行してゐますものとして、斯る心配は毫もありません。特に山室大佐の如き、信仰から云ふも、熱心から云ふも、年功から云ふも、勉強から云ふも固より其の八面十六臂、凡有る藝當をなして、一身を救世軍に捧げたる、人物ある以上、君の兩肩に、日本の救世軍の經營が負擔せらる可きは、必然の歸結であり、又た當然の成行であるに、申さねばなりません。

我が日本帝國は世界の長を受け納れて、何等各なる處はありませぬ。ブース大將の明治天皇に拜謁したるは、事實に於て、日本が救世軍を、多くの宗教團體の一として、受取つたる徴候に申すも、決して過言ではあるまい。

私は決して國自慢をするのではない、然も日本の如く、世界の善美を攝取するに於て、無我にして寛大なる國は、何處に其の比例を見出すことが出来ませう乎。若し救世軍が、日本の建國の根本義に恭順し、其の治化を裨補するに於ては、其の後に於ける隆昌は、固より私が保證する迄もな

いここでありませぬ。而して其の當面の責任者として、親友山室軍平君を見出すことは、三十六年來の舊友として、私に取りては如何ばかり愉快であります。

但だ私は最後に一言申し上げたことがあります。人間は其の地位が進むに従ひ、責任感が多くなります。責任感が多くなるに従ひ、臆病になります。別言すれば、戰鬥的精神が衰へて参ります。併し救世軍が若し之を失ひますれば、鹽其味を失ふものであります。私は山室大佐が、決して初心を失墜するは申しませぬ。併し萬死を冒して、自由廢業運動を做した當初の精神を、何時迄も御記憶ある様に願ひます。人間は、初心を失はぬことが、何寄りの寶に存じます。

滿堂の各位、別段面白くない長談義を靜聽せられたのを、感謝致します。茲に恭しく山室君の一路平安を祈ります。

(完)

大正十四年七月十日印刷  
大正十四年七月十五日發行

定價金貳拾錢(送料四錢)

版權  
所有

著者兼發行者  
山室軍平

東京市神田區一ツ橋通町五番地

印刷者  
上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所  
株式會社 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

東京市神田區一ツ橋通町五番地

發行所  
救世軍出版及供給部

振替東京四四〇〇番

296  
9

民衆基督教叢書

山室大佐著

(定價各冊共拾五錢宛、送料二錢宛)

### 労働の宗教的意義

【第六版】

労働問題を云々する人は世に頗る多い。然し是れを單に經濟問題としてのみ取扱ふ所に、満足なる解決はない。此書は神聖なる労働問題を敬虔なる宗教の立場から説いたのである。

### 聖書の感化力

【第十五版】

此の書を読み、聖書の偉大なる感化力に驚歎せぬ者はない。實例を豊富に網羅してある。これを讀めば聖書が讀みたくなり。聖書を讀めば、これが讀みたくなる。

### 基督教と日本人

【第五版】

政治界、實業界、教育界、人道界、宗教界、婦人界の各項に分ちその基督教信者を擧げて、簡潔にその信仰と人物とを紹介したるもの、是非一讀あれ。

### 病床の慰安

【第六版】

病氣は人生の重荷である。然しこれを讀めば重荷でなくなる。知己友人の中に病人があつたとしたら、是れを贈りたい。これに優る見舞品はない。



終